

FIWC Kyushu

03 May  
2018  
Spring

# NePALCAMP



We wanna build the  
**Community  
House.**



# 目次

1. はじめに	P.3
2. FIWC について	P.4
3. ネパールについて	P.4
4. スケジュール	P.6
5. 重要人物紹介	P.8
6. クラウドファンディング・助成金報告	P.10
7. ワーク詳細	P.14
8. イベント	P.23
9. 生活状況	P.26
10. 現地での様々な活動	P.31
11. 安全管理について	P.34
12. 保険係より	P.37
13. 会計報告	P.41
14. 他己紹介	P.43
15. 感想	P.48

# 1. はじめに

ネパールキャンプを一言で表すなら、「大変だった」という一言に尽きる。ネパールという国がまだまだ発展しておらず、国家として未熟である。そんな中で、2015年にネパール大震災が発生したのだ。震源地近くの村では、レンガ作りのもろい家屋はほとんどが倒れてしまった。今回のキャンプで屋根を作った公民館（グンバ）も、この震災で崩壊してしまったものである。

キャンプリーダーをしたいと思った時も、ばねちゃんという強力なコーディネーターがいるのにここで途切れてしまうのはもったいなさすぎると思った。下見キャンプのときに、グマンマニサワラ村の人々から公民館（グンバ）の必要性を直々に聞いて言葉だけでなく心から伝わる何かを感じた。それは、このワークをグマンマニサワラ村の人たちと一緒にしたいと強く思い、一年間奔走してきた。このように、キャンプは誰かと一緒にワークをしたいという単純な思いで動いている。

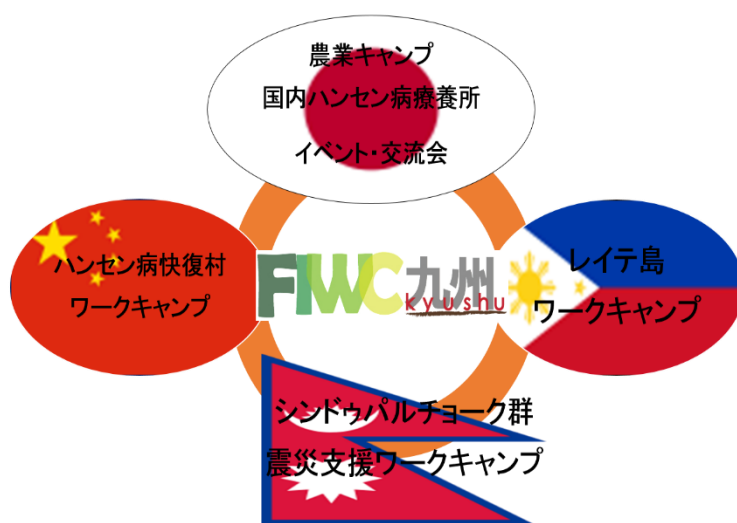
最後に、下見キャンプから一緒に活動してきた6人、本キャンプから参加した9人、国内係のなのみち・すずな、前リーダーのくるみには本当に感謝している。西日本国際財団さま、FUNNさま、真如園さま、クラウドファンディングのパトロンの皆さまは、私たちの活動を理解して温かくご支援いただいたことを心より感謝申し上げます。

2017年度ネパールキャンプリーダー轟木亮太

## 2. FIWC 九州について

FIWC とは、フレンズ国際ワークキャンプ (Friends International Work Camp) の略称である。第二次世界大戦後復興のため、アメリカ・フレンズ奉仕団(AFSC) がワークキャンプを日本で実施した。そして、1950 年代に AFSC から独立し、FIWC が結成された。私たちの FIWC の「フレンズ」はその精神を受け継ごうと意思から採用された。それ以来 FIWC は、国内外でワークキャンプを 60 年以上実施している。現在その支部は全国に広がり、FIWC 関西委員会、関東委員会、東海委員会、九州委員会が活動している。

私たち九州委員会は九州（主に福岡）の大学生が主体となり、学生のみで運営・活動しており、国外ではフィリピン、中国、ネパール、国内では耶馬溪の農業キャンプや国立ハンセン病療養所などを中心に活動してきている。私たち FIWC は、一般市民・学生による任意の非政府組織 (NGO) であり、いかなる政治・宗教団体とも一切関係のない学生団体である。



## 3. ネパールについて

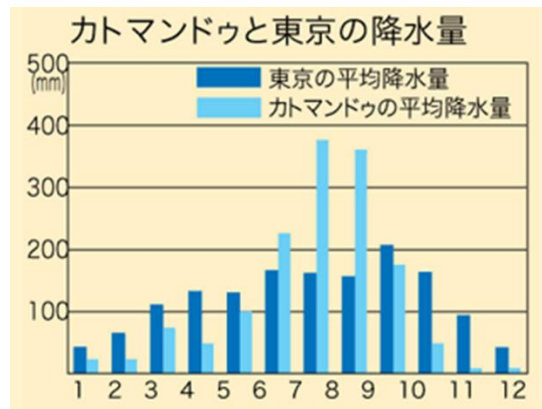
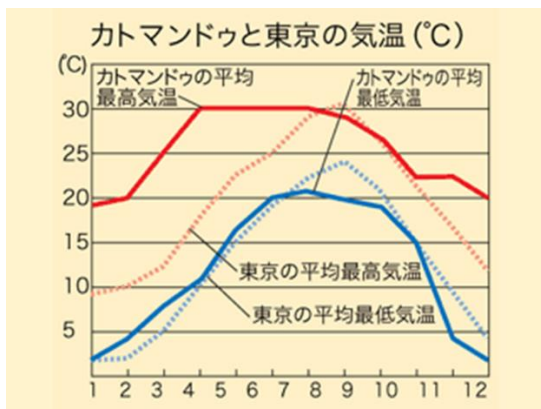
### ● 基礎データ

首都	カトマンズ
面積	14.7 万平方 km(北海道の 1.8 倍)
人口	2649 万 4504 人
人口密度	180 人/km <sup>2</sup>
民族	バフン、チェットリ、タマンなど 60 以上の民族
公用語	ネパール語
宗教	ヒンドゥー教、仏教、イスラム教
開発ランク	145 位
世帯数	542 万 7302 世帯
識字率	65.9%

(ネパール NGO ハンドブック 2015 年度 より)



- 気候について



( 出典 : 地球の歩き方 ネパールの天気 & 服装ナビ <http://www.arukikata.co.jp/weather/NP/> )

- ・ 一日ごとの気温の寒暖差が激しい気候であるため、早朝と正午過ぎの気温が著しく異なる。
- ・ 年間の降水量の変化が大きく、夏は雨季となり多くの雨が降る一方で、冬から春にかけては乾季となり雨が降ることが少ない。

- 2015年4月25日のネパール大地震について

震源：カトマンズ北西、地震の規模：マグニチュード7.9

被害状況：負傷者2万人、死者約1万人、被災者800万人（ネパールのみ）

経済損失：約6000億円。これは当時のネパールのGDPのおよそ4分の1に値する。

復興状況：地震発生直後は、多くの国やNGOからの支援が届いた。首都カトマンズでは復興が進んでいるものの、農村部ではトタン屋根の仮設住宅に暮らす人が多くみられる。



## 4. スケジュール

### キャンプ前スケジュール

- 2017.11.7. 第1回ネパールキャンプ説明会@九大伊都キャンパス
- 2017.11.11 キャンプ合同説明会@びおとーふ
- 2017.11.15 第2回ネパールキャンプ説明会@西南学院大学
- 2017.11.17 第3回ネパールキャンプ説明会@びおとーふ
- 2017.11.30 春キャンパー募集締め切り
- 2017.12.5. 第1回事前 MTG@びおとーふ
- 2017.12.12. 第2回事前 MTG@びおとーふ
- 2017.12.22. 第3回事前 MTG@九大中央図書館
- 2018.1.19. 第4回事前 MTG@びおとーふ
- 2018.2.10. 第5回事前 MTG@九大医学図書館
- 2018.2.16. ネパール人との交流会@びおとーふ
- 2018.2.16. 第6回事前 MTG@びおとーふ
- 2018.2.23. 第7回事前 MTG@びおとーふ
- 2018.3.8. 後発組・出国直前 MTG@びおとーふ



### キャンプスケジュール

2/28	福岡空港発（福岡→青島）
3/1	カトマンズ着（青島→昆明→トリブバン） 銀杏旅館泊
2	村に移動
3	村人とのミーティング（GAM）
4	村を回る
5	竹を切るための署名活動 ワーク（サポートの竹を切る）
6	ワーク（竹を切る）
7	木を伐採する許可を得る ワーク（木を切る）
8	ワーク（竹を切る）
9	ワーク（竹を切る、運ぶ）
10	先発・ワーク（竹を切る、運ぶ） 石と鉄筋の調達 後発・福岡空港発（福岡→青島）
11	先発・スキルワーカーを探す

	後発・カトマンズ着（青島→昆明→トリブバン） 後発・銀杏旅館宿泊
12	先発・サポートの鉄筋を運ぶ 後発・銀杏旅館→村へ
13	ワーク（鉄筋を切る）
14	ワーク（ベニヤ板の荷下し、竹を切る）
15	ワーク（竹を切る）、ラムチェ村へ（FI 関東の助っ人）
16	ワーク（サポートの建設）
17	ワーク（サポートの建設）、イベント
18	ワーク（サポートの建設）
19	ワーク（サポートの建設）
20	ワーク（サポートの建設）
21	ワーク（サポートの建設）
22	ワーク（サポートの建設、屋根の鉄筋の組み立て）
23	ワーク（サポートの建設、屋根の鉄筋の組み立て）
24	ワーク（サポートの建設、屋根の鉄筋の組み立て）
25	ワーク（屋根の鉄筋の組み立て）
26	ワーク（屋根の鉄筋の組み立て、セメント流し込み） 先発・村出発、カトマンズ到着（18:00 頃）
27	先発・観光。 後発・ワーク（セメント流し込み）。 村出発、カトマンズ到着（20:00 頃）
28	早朝にワークの全工程が終了。 午前観光、カトマンズ出発。 トリブバン国際空港発（カトマンズ→昆明）
29	福岡空港着（昆明→上海浦東→福岡）

### **キャンプ後スケジュール**

2018.3.31 第1回事後 MTG@九大 医学図書館

2018.4.6. 引き継ぎ MTG@びおとーぶ

2018.4.14. 報告会練習、試食会@びおとーぶ

2018.4.21. 春キャンプ報告会 @TONAGI cafe

※びおとーぶは、FIWC 九州委員会が加入している NPO・NGO 共同事務所である。

※銀杏旅館については、後述の重要人物・その他の活動を参考にしてほしい。

## 5. 重要人物紹介

### ママ (コモラ・ラーマン)

毎日ご飯を作ってくれたキャンパーのお母さんの存在。朝は紅茶を、昼と夜はカレーを振舞ってくれた。食事はママの掛け声、「ラッソー (いただきます)」で始まり、「ラッソー (ごちそうさま)」で終わるのが恒例で、その言葉を聞くとみんなで囲んだ食事の風景が思い出される。皿に盛られたカレーが減るとすかさずおかわりのごはんとカレーをつぎに来てくれる姿からは、お腹いっぱい食べて満足してほしいというママの愛を感じた。こういった支えのおかげで、全員が元気にワークを行い、楽しく生活を送ることができた。



### パパ (ポドム・ラーマン)

食事やワークでお世話になった、キャンパーのお父さんの存在。ママと一緒に紅茶やご飯の給仕をしてくれた。彼の優しい笑顔と「ラッソー」は忘れることができない。キャンパーと村人全員で公民館を作り上げたいという思いが人一倍強く、積極的にワークに参加してくれた。いつもかわいい笑顔を見せてくれるが、ワーク中に見せる真剣な顔つきは、家族のために仕事な取り組むお父さんの様でかっこよかった。



### 筋田雅則さん

ネパールの首都カトマンズ近郊のサンガという町で銀杏旅館を経営している。登山が趣味で、ヒマラヤに魅せられて何度かネパールを訪れていた。その過程で村の子供たちの教育の現状を目の当たりにし、学校作りを始める。現在は4人のネパール人の子供が旅館の経営の手伝いをする一方、筋田さんは彼女らの生活費や学校に通うための資金を支援しながら一緒に生活をしている。今回はキャンプ地に向かう前に銀杏旅館に宿泊した際にお世話になった。異国の地で振舞われる日本食と筋田さんの明るく元気にお話しされる姿はキャンパーのくつろぎと活力になった。







### ミーラン・タマン

村で過ごす1ヶ月の間滞在させてくれた家の長男。彼の部屋をキャンパーの寝床として貸してくれた。英語を話すことができ、ワークに積極的に参加してくれる頼りになる存在で、優しい父親としての一面も持つ。紅茶や現地のお酒ロキシーを振舞ってくれることもあった。普段はあまりお酒を飲まないが、キャンパーとのお酒の席では大いに場を盛り上げてくれ、おかげで楽しいひと時を過ごすことができた。

### クリシュナー・ドン

ワークに積極的に参加してくれた村人の1人。リーダーの轟木とお酒を交わしたことで仲良くなり、よく手伝いに来てくれるようになった。ノリが良く、英語ができるので他のキャンパーとも仲良し。本業は歌手でありダンサーという生粋のネパーリーアーティスト。自分が作った曲の動画を見せてくれ、車中では「This is my new song!」と言って三回連続で再生したこともあった。「スーパーパワー」というタバコと同じような効果を持つ粉が大好き。「Super power!」と、手に持って嬉しそうに見せてくる姿は忘れられない。



### パネちゃん(スンダー・ラマ)

コーディネーターと通訳を務めてくれたネパールの好青年。ネパールで旅館を経営する日本人、筋田さんのもとでお手伝いをしていた経験があり日本語を話すことができるため、キャンパーの良き話し相手、相談相手にもなってくれた。また、ワークや日常生活に関する様々なアドバイスや、人の良さがにじみ出ているような彼の笑顔は幾度となくキャンパーの支えになった。ガタガタの山道の車での移動も、彼のドライブテクニックと優しさ、ネパーリーソングでなんとか乗り切ることができた。そんな彼だが、実はいたずらやいじりが大好きという少年らしさも持ち合わせており、お酒を飲むと少しエスカレートする。

## 6. クラウドファンディング (CF)・助成金報告

### クラウドファンディング

今キャンプでは高額なワーク費の補填のために、クラウドファンディングを実施した。クラウドファンディングとは資金調達の方法の1種で、インターネットを通じてプロジェクトに共感した人から支援を受けるというものである。この度、株式会社 CAMPFIRE が運営するクラウドファンディングサイト「GoodMorning」にてプロジェクトを投稿し、約1ヶ月の期間かけ目標であった¥400,000 を達成した。「GoodMorning」では、支援者にリターンという形で物品をお返しすることが決められており、本プロジェクトのリターンとしてキャンプ報告書やカトマンズで販売されている手芸品を設定した。

### プロジェクト詳細

プロジェクト名:「ネパールで村人と共に、地域の憩いの場を取り戻したい！！」

実施期間: 2017年11月24日～2017年12月26日

目標金額: ¥400,000

支援金額: ¥438,000

支援者数: 53人

URL:

<https://camp-fire.jp/projects/view/54094>



ウェブページ画面

### クラウドファンディングの後方支援



クラウドファンディングを実施するにあたり、福岡県NPO・ボランティアセンターが主催する「福岡発！暮らしやすい社会をつくるプロジェクト」！ (<https://camp-fire.jp/channels/akatsuki>) に参加し、特定認定NPO法人アカツキの支援を受けることとなった。クラウドファンディングプロジェクト成功のため

に広報文およびリターンの設計や対象支援者の分析、またプロジェクト進行中には適宜アドバイスをもらうなど多方面から支援していただいた。

## ・クラウドファンディングの広報

広報面では、アドバイスをいただきながら FIWC 九州の Facebook や Twitter を中心に支援を呼びかけた。また、朝日新聞社や共同通信社からの取材を受け、紙面に掲載させていただいた。「GoodMorning」のプロジェクトページでは定期的に活動地やキャンパーの紹介などの活動報告を投稿し、キャンプの雰囲気やキャンパーの思いが支援者に伝わるように努めた。

クラウドファンディングの成功だけでなく、様々な人の思いも巻き込んだより大きなプロジェクトであることを実感した結果となった。

加えて、FIWC の OB の繋がりから、2017 年 10 月 24 日に田川青年会議所にてワークへの寄付を呼び掛ける機会をいただいた。会議所の皆様のご厚意もあり、¥100,000 もの額を集めるに至った。ここで支援していただいた方についても寄付額に応じて、クラウドファンディングと同様リターンを送付する予定である。

(セプト)

2017年(平成29年)12月21日(木曜日)中国新聞社 | 地域 | (4)

大地震が起きたネパールのシンドパルチョーク県にある村の住民と公民館再建について話し合う学生ら(手前右)＝9月(FIWC九州提供)



### 北から南から

## ネパールに公民館再建を

### 地震で損壊 福岡の学生らネット募金

大地震が起きたネパールに類い場となる公民館を再建しようと、福岡県内の大学生らでつくる団体がインターネットのクラウドファンディング(CF)で資金を募っている。一部の学生は既に現地を視察し、来年2月末から約1カ月間、再建工事を手伝う予定。資材費のうち40万円が当面の目標だ。

ネパールでは2015年4月25日、マグニチュード(M)7.8の地震が発生。同5月12日にもM7.3の地震があり、計約9千人の犠牲者が出た。

フィリピン人のインフラ整備など国内外の社会問題に取り組み「FIWC九州」(福岡市)は昨年からはパルで活動し、損壊した水タンクを復旧した。

再建を手伝う公民館は、今年5月の地震の震源地に近い、シンドパルチョーク県にある。今月27日までCFのサイト「CAMPFIRE」を通じて寄付できる。1万円以上を寄付した人には、公民館に名前入りプレートを設置する。メンバーで九州大2年の轟木亮太さん(20)は「ネパールの被災状況を知ってもらい、支援の輪を広げたい」と話している。

15年5月の地震の震源地に近い、シンドパルチョーク県にある。今月27日までCFのサイト「CAMPFIRE」を通じて寄付できる。1万円以上を寄付した人には、公民館に名前入りプレートを設置する。メンバーで九州大2年の轟木亮太さん(20)は「ネパールの被災状況を知ってもらい、支援の輪を広げたい」と話している。



中国新聞 2017年12月21日

# 公民館の再建 CFで

## ネパール地震で倒壊 村支援

2015年のネパール地震で大きな被害を受けた村の復興支援に、福岡県内の大学生が取り組んでいる。復興が停滞する中、インターネットで資金を集めるクラウドファンディング（CF）を活用。現地に赴き、住民と力を合わせて地元が要望する公民館の再建をめざす。



①ネパール地震で被災した村民と打ち合わせをするF・WC九州のメンバーたち  
②地震で倒れ、再建中の公民館  
③いずれも9月、ネパール・マニサワラ村、森木亮太さん提供

## 福岡の学生 あすまで資金募集

朝日新聞九州版 2017年夕刊

11月、福岡市内に九州大の学生らが集まった。ネパール地震の復興支援を計画するプロジェクトの代表が兼学部2年の森木亮太さん(20)が渡航計画を説明、参加者を募った。学生らは中国やフィリピンなどで国際協力を携わるF・WC九州のメンバー。九州大と西南学院大、福岡大、福岡教育大、中村学園大の約70人が加わっている。今年からネパールでの活動に取り組み始めた。2〜3月には被害が大きかった北東部シンドウパルチョーク郡の村に赴き、タンクの破損や地殻変動でかかれた飲み水を確保するための改良工事に力を注いだ。次に取りかかるのが、公民館の再建だ。森木さんによると、公民館があるマニサワラ村は人口約300人。地震で複数の住民が亡くなった。2年半が過ぎた今も、半数以上の世帯が仮住まいという。公民館は住民が話し合いや冠婚葬祭、宗教行事に使っていた。自力で資金を集めて再建を試みたが、資材が高騰を充てるが、足りない分をCFで募る。目標額の40万円はすでに集まったが、26日まで続けるといふ。森木さんは「村人が本場に必要ない公民館を、村人と一緒に作っていきたい」と話している。

### 住宅・公共施設 復旧道半ば

約9千人が犠牲となったネパール地震。発生直後から復旧支援にかかわる日本赤十字社の辻佳輝・開発協力課長は「復旧は進んでおらず、道半ばだ」と語る。辻さんによると、ネパール政府は被災者に耐震性のある住宅

### 影響の悪さ 交通事情

建費の対象となる約77万戸のうち、再建できたのは約8万戸にとどまる。病院や学校など公共施設の復旧も遅れている。政情が不安定なことに加え、交通の便が悪いことも影響している、と辻さん。首都カトマンズから被災地に資材を運ぶには5時間以上かかり、約3カ月続く雨期には工事ができないという。

資金は、CFサイト「CAMPFIRE」(<https://camp-fire.jp/projects/view/54094>)で募っている。

(伊藤爾利)

## 助成金

本プロジェクトを行うにあたり、二つの団体に助成金を申請し、採択していただいた。

### 1. 団体紹介と申請額

- 公益財団法人西日本国際財団 (20万円)
- 九州地域 NGO 活動助成金 (NGO 福岡ネットワーク) (20万円)

### 2. 申請内容 (事業目的)

‘事業最大の目的は2年前に起きたネパール大震災の復興支援を行うことである。自然災害の多いネパールで、災害に耐え被災者に役立つ公民館を建設する。また農村で村人と共に生活し労働することで、学生は次世代を担うグローバル人材の素養を身につけること、村人は自ら村を活性化させようという士気の向上も目的とする。’

### 3. プレゼンテーションの概略

村人と共に  
Community House Project in Nepal  
FIWC九州 ネパールキャンプ2017  
西日本国際財団 2017年12月11日

提案プロジェクト: コミュニティーハウスの建造

決定理由

- ・ **実現可能性**が高く、村人が**協力的**
- …現地の人が100万円出し合い、基礎が完成している
- ・ 公民館の**必要性**に共通認識がある
- …現在公共施設がなく、MTGは玄関先で行っている

効果

- ・ 災害に耐えうる**屋内施設の利用**
- ・ **冠婚葬祭**などの行事に用いる

失ってしまった唯一の公共施設の復元

↓

コミュニティーのより強い団結に寄与

### 4. 反省

いずれの助成金申請も書類審査とプレゼンテーションの二つの審査があった。助成金申請を通して、自分自身もこのプロジェクトの目的や意義を見直す機会になり、良かったと思ってる。審査会では、多くのご指摘並びにアドバイスをいただき、プロジェクトを成功させることにもつながった。

## 7.ワーク報告

- 概要

場所：ネパール連邦民主共和国シンデューパルチョーク郡グマンマニスワラ

内容：公民館（お寺）における屋根の施工

期間：2018.2.28~2018.3.28

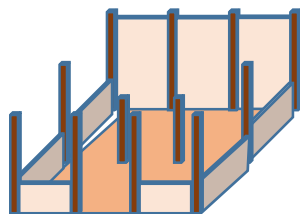
収容人数：最大約 50 人。村人 300 人全員が用途に応じて使用可能なものとする。

- 目的

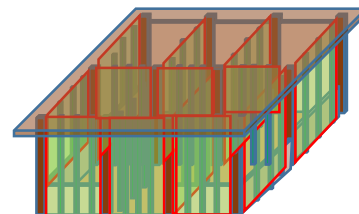
2 年前に発生したネパールの大地震にて多くの家屋が倒壊した村に赴き、復興・発展に寄与すること。具体的には、村の公民館として使用する建物の屋根の建設。また、このワークを通して村の自発性・集団意識をより強めるきっかけを作ること。

- 詳細

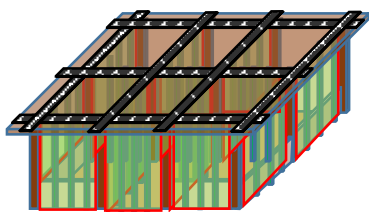
屋根を施工するために、主に三つの工程を踏んだ。



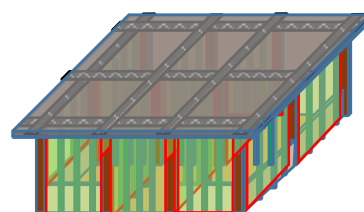
元の状態



1. サポートの施工



2. 鉄筋組立て



3. コンクリート流し込み

## ① サポートの施工

コンクリートを支えるために、300本のサポート(鉄棒200本、竹100本)を組み立てた。竹のサポートは村にある竹を切り、一定の長さに切るところまですべて手作業で行った。

### ● 竹サポートづくり

1. 竹藪から竹を切り、約3mずつに切断し、3本ずつに束ねる。



2. 束ねた竹を広い道路まで担いで運搬する。その後、公民館までトラックで運搬する。



### ☆集まった竹



3. 竹の先を再度垂直に切りそろえる。



4. 切りそろえた面に板を付ける。

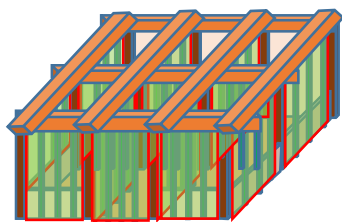


● サポートの組み立て

1. 140cm×30cm の梁の土台となる平たい木板に 5 本のサポートを打ち付け、固定する。



2. この作業を下図の梁を建造する部分の 17 か所すべてに行う。



3. スキルワーカー（大工）により、梁の土台となる平たい木板の両端に垂直となるように高さ 10cm の木版を打ち付け、四角形の型を作る。

4. 梁と梁との間を埋めるように長さ 140cm の角材を一定の間隔で打ち付ける。



5. 打ち付けた角材の上に合板を敷く。

Before



After





## ② 鉄筋組み

### ● 梁の鉄筋

1. 直径 1cm の鉄筋を 1m ずつに切断する。



2. それらを一辺 20cm の正方形となるように折り曲げる。



3. 直径 1.5cm の鉄筋に 27cm 間隔で 2. の正方形を固定し、梁の骨組みを作る。



4. 鉄筋を梁の型の中に埋め込む。



### ● 屋根の鉄筋

1. 板の上にビニールシートを敷き、その上から鉄筋を編み込む。



☆敷き詰められた鉄筋



### ③ コンクリート流し込み

1. セメント:砂:砂利=1:3:6 で混ぜ合わせる。



2. バケツリレーで屋根の上まで運ぶ。



3. 水を含ませながらコンクリートを作成する。



4. 鉄筋に敷き詰める。



1～4を何度も繰り返す。

**Complete!**



## 平成 29 年度 ネパール本キャンプ ワーク会計報告

(収入の部)

項目	金額(NRs)
九州地域 NGO 活動助成金	200,000
西日本国際財団	200,000
CAMPFIRE	394,784
寄付金	100,000
合計	894,784

(支出の部)

項目		決算額 (NRs.)	合計(NRs.)
資材費	鉄筋・セメント	306,600	
	プライウッド(合板)	107,000	
	オイル	160	
	砂利	20,700	
	砂	43,000	
	ダゴ (5 個)	175	
	プラスチックシート	2,160	
	ワイヤー	3,000	
	釘	900	
	鉄筋サポートレンタル	20,000	
			503,695
輸送費		71,000	71,000
人件費	エンジニア見積もり作成代	5,000	
	設計図	4,000	
	鉄筋サポート運搬人件費	12,000	
	スキルワーカー費	54,700	
	コンクリ人件費	15,000	
	コーディネーター費	84,445	
	技術支援費	800	
			175,945
返礼品費	プレート	10,800	
	クラファンリターン	6,000	
			16,800
備品	ヘルメット (7 個)	1,400	
	カライ (15 個)	2,700	

	トタン・竹かご	8,000	
	カッティングボード	200	
	釘	600	
	ハンマー	700	
	パイプ	5,500	
			<b>19,100</b>
<b>感謝費</b>	肉	8,000	<b>8,000</b>
	<b>合計</b>		<b>794,540</b>

## 反省

プロジェクト終了後、キャンパー内で MTG を行い、ワークに対する反省点および、それに対する改善案を話し合った。今後この様なプロジェクトを行う際にこれらを生かしてほしいという思いを込めて以下に記す。

### ● 進捗に関して

- ・ 作業が遅れ、工期が延長したため、休日にもワークを行わなければならなかった。

(原因)

- ・ スキルワーカー（大工）として現場を監督できる人がいなかった。

改善案：下見キャンプ時点でスキルワーカーを確保し、契約書等の文面を用いて書面で契約を結ぶ。

- ・ 資材の確保が遅れた。

改善案：数人が予め工期より先に渡航し、日本人の多い時期にワークを行えるように下準備をしておく。または、国内にいるときにコーディネーターに資材発注を委託する。

- ・ 工事開始時の村人のワークへの参加率が悪かった。

改善案：ワークを始める前に村人に呼び掛けを行う。村の至る所に、ワーク時間・必要人数、記載したポスターを掲示する。この様なことを行い、村人が公民館の必要性を理解し、自主的にワークに参加するように促す。

- ・ 四者（FIWC・コーディネーター・スキルワーカー・村人）間での意思疎通がうまくいかなかった。

改善案：四者（FIWC・コーディネーター・スキルワーカー・村人）で日々の MTG・日程確認を行う。

### ● ワーク時の安全対策

- ・ 工事現場に子供たちが近づき、危険であった。

改善案：村人と話し合い、一定の基準を設けて共通認識を持ったうえで子供たちに注意を呼び掛ける。

- ・ 村人の怪我が目立った。

改善案：素手・素足・サンダルで作業を行ったことが原因で怪我をすることが多かった。ワーク時には、軍手と運動靴を着用することを村人にも呼び掛ける。

### ● 備品管理

- ・ プロジェクト終了時、購入したヘルメット・コンクリートを運ぶ桶の所在を明らかにしないまま、放置してきた。

改善案：ホームステイ先の家に置かせてもらうなどして、村人の私物とならないように管理者をたてて保管する。

## 総括

震災によりすべての建物が倒壊し、政府の支援も行き届かない村での活動は多くの問題があった。村人が望んでいるものの、資金や生活の余裕のなさを理由に断念している様々なことを私たちは目の当たりにした。今回のワークに際して、私たちがサポートすることでそれらを実現したいと考えていた。また、私たち日本人が関与するからには、再度地震が起こった際に避難所として機能する建物を建設することを目標とした。現在はほとんど政府の支援が入らないこの村にとって最も望ましいことは、JICA 等の経験をもつエンジニアが工事の設計・指揮監督を行い、設計基準を満たした公的な建物を建て、それが村の発展するきっかけとなることである。

しかし、私たちが外部から監督者としてエンジニアを招くことは、村人・コーディネーター双方にとって、全く知らない人と活動することであり、今回実現できなかった。また、渡航後すぐに行った村での全体ミーティングにおいて屋根の建設を決定したものの、その時約束したはずのスキルワーカーが来ないため、ワークの指揮を執る人がいない状況であった。その後、コーディネーターと村人が自主的に探し、協力をお願いしたスキルワーカーが今回指揮を執ってくれることになった。



現地の人とのやり取りの中で、正しい情報と、そうでないものを判断しなければならない場面が多々あった。ネパール人は日程や時間、一度決めたことに対する責任をあまり重大に受け止めないことが多い。そんなネパール人と円滑にプロジェクトを行うためには、日々村人と積極的に交流し、信頼関係を構築しながら余裕をもって終わられるワークの規模で行う必要があると感じた。それでも毎日ワークに来て、主体的にプロジェクト

を進めてくれる村人と共に何とか屋根を完成させることができた。

屋根を建設するにあたり、政府に設計図を提出し、村唯一の公共施設となった。今回の事業はあくまでも公民館を使用可能にすることであり、屋根を建設することで村人が集まる場所ができた。村人の自主的な話し合いの結果、公民館を管理する人が決定し、今後内装などの完成に向け計画を立て、実行していく予定だ。この公民館が村人にとって大切なものになることを願っている。



## 8. イベント報告

### 第一回

#### 3月10日(土)「日本食(焼きそば)を振舞おう」

村の子供たちに焼きそばを振る舞った  
ソースは日本から持参した焼きそばソースを、  
麺は現地で購入したパスタ麺で代用した。  
子どもたちにはとても好評で「ミトチャ(おいしい)」笑顔で言ってくれた!!!



また、食後に日本から持参した  
ジェンガを行ったところ、  
とても気に入ったようで、  
楽しそうに  
いつまでも遊んでくれた。



## 第2回 3月17日(土)「運動会」

後発組が到着してから初めてのイベントで、第1回のイベントよりも規模が大きなものだった。

多くの村人に参加してもらえるように、イベント前日にはキャンパーが二手に分かれて村の周辺で告知を行った。

---

### ◎プログラム

- ①縄跳び
  - ②しっぽ取りゲーム
  - ③ハンカチ落とし
- 



#### ①縄跳び

日本から縄跳びを二つ持参した。縄跳びを見せるやいなや、子供たちがすぐ集まってきて、興味津々で、とても盛り上がった。

中には数十回跳ぶような子供たちもいて、ネパールの身体能力の高さを感じた。



#### ②しっぽ取りゲーム

日本から持参した黒いビニール袋をしっぽとし、それをズボンに挟んで行った。

このゲームは白熱した結果、子供たちが喧嘩してしまうというハプニングもあったが、けがなく終わることができた。

#### ③ハンカチ落としゲーム

日本ではおなじみですが、実はネパールにも同じようなゲームがある。

その名もトゥピーグッモーニングゲーム。トゥピーとはネパール語で帽子のことで、ネパールではハンカチの代わりに帽子を使う。今回は帽子を用いて。ネパール風に行った。





## 反省

- ・うまく連携が取れておらず、途中までは通訳がない状態で行うことになった。
- ・イベント中に子供たちにスマホやカメラを貸しているメンバーが多く、貴重品に対する認識の甘さがあった。
- ・イベントの輪の中になかなか入りづらい子供たちの気を遣うことができなかった。
- ・どのメンバーがイベントに参加するかをきちんと決めていなかった。

## 総括

反省は、イベントの内容をもっと練る必要があったことだ

イベントの意義を捉え、それに沿うように準備をすべきだった

今回は子供ばかりを呼ぶものになったので、大人や青年の参加がなく、交流を行うことができなかった

一方で、写真にあるようにイベントに来てくれた子どもたちはみんな笑顔で楽しんでいた。その日からキャンパーの周りによく子どもたちが寄るようになり、キャンパーと子供たちとの親睦を深めることができた。イベントは成功したと思う！



## 9. 生活状況

### (1)衣

昼は半袖でも暑いほどだが、朝晩はかなり冷え込むため、パーカーやウィンドブレーカーを着た。寝るときは寝袋を着て、寒い時は村人の家の毛布をかぶって寝た。



ワーク時は、安全面への配慮で帽子またはヘルメット、長袖長ズボン、サンダルでない靴、軍手を着用するように決めていたが、暑さゆえに半袖でワークをすることもあった。



## (2)洗濯

村の水場で、KP(キッチンポリス、後述)が全員の洗い物をまとめて、主に日本から持ってきた洗剤(ナノックス)を手洗した。



## (3)風呂

風呂などない。洗濯する水場で、服を着たまま水を浴び、日本から持ってきたシャンプーやボディーソープで体を洗う。気温の高い日中のうちに洗わなければ、凍え死にそうになる。

## (4)食

以下のような食生活を送った。基本的にママが作ってくれる。

6:30 朝食:クッキー、チャイ(ネパールのお茶。甘かったりジンジャーが強かったりするが、温かくて美味しい。)

10:00 昼食:ダルバート・タルカリ

14:00 おやつ:チャウチャウ(ワーク中にお腹がすくということで途中から導入された。(またはタルカリ&チューラ(お米を潰して乾燥させたもの。硬い。))

19:30 夕食:ダルバート・タルカリ

お腹を壊している人はママにお願いして、ダルバート・タルカリではなく日本から持ってきたお茶漬けやふりかけを食べることもあった。

## ～ネパールフードライブラリー～



### 【ダルバート・タルカリ】

ごはん(バート)と、豆スープ(ダル)と、いも(アル)やカリフラワーなどの野菜がメインのネパール風カレー(タルカリ)からなる定食。ごはんの量がすごいが、ワークで腹を空かせたみんなはおかわりもする。特に祝い事の際は鶏肉やヤギ肉、水牛の肉などがタルカリに入る。めったに現れない動物性タンパク質に歓喜。

### 【チャウチャウ】

ネパールの袋麺。チキンラーメンのようにそのままバリバリ食べるもよし、野菜とともに煮込んでラーメンにするもよし。



### 【モモ】

ネパールの餃子。水牛の肉などが入っている。街のお店で食べた。モチモチでジューシー。天神などに専門店出しても売れるんじゃないかと思うくらい美味しい。

### 【チョウメン】

ネパールの焼きそば。ピリ辛で美味しい。現地人はさらに激辛ソースをかけて食べる。



### 【ラッシー】

カトマンズの名物。70 ルピーだが、濃厚な甘さで、最初から最後まで美味しい。上に乗っているドライフルーツが良いアクセントになっている。

## (5)夜の本気ダンス

不定期に、夜な夜な村人と酒を交わしながらママの家の前で大音量の音楽をかけて踊り狂う。うるさい。でも楽しい！

## (6)動物

村にはそこら中にヤギ、ニワトリ、牛、犬がいる。かわいい。しかし、狂犬病対策のため触ってはいけないお約束。



## (7) KPのお仕事紹介！

KPとは「キッチンポリス」の略称！

●KPの仕事内容は

- ◇ キャンパーの食事管理
- ◇ 裏ワークの把握  
※裏ワークとは村の生活環境を向上するためにしていたワークである。水場の苔を取るなどした。
- ◇ キャンパーの服の洗濯
- ◇ 毎食の調理補助

主にこの4つです！

本キャンプではワークの休息の意味を含めて毎日3人がKPを順に担当することにした。



～KPの一日の流れ～

- 6：30 チャイというネパールのお茶を飲むので、お茶を運び。
- 8：00 キャンパーからワークに行く前に洗濯物を集めて洗濯。  
お昼ご飯の調理補助
- 10：30 お昼ご飯の皿洗い  
KP 休憩タイム
- 14：00 軽食の調理補助  
裏ワーク or 休憩タイム
- 17：00 夜ご飯の調理補助
- 20：30 夜ご飯の皿洗い



## ●KPの反省点

・キャンプリーダー、ワークリーダーのことを考慮してシフトを立てていなかった。

基本的にワークリーダーとキャンプリーダーは基本的にワーク場所を離れないほうが良かった。しかし私がシフト表に加えていたため二人の分を変更しなければならなかった。

・皿洗いを毎回出来たわけではなかった。

今回のキャンプでご飯はホームステイさせてもらっているお母さんに作ってもらっていた。そこで少しのお礼と思い皿洗いをしようと考えたが、お母さんがほとんどしてしまいできなかった。私たちがやると言っても、しなくていいと言って断られてしまった。



## (8)LP について

### LP=ライフポリスとは？

- ・朝キャンパーを起こす
- ・部屋の掃除を促す
- ・洗濯物を管理する

などの仕事をする人！

### LPの反省

- ・キャンプの後半は、自分の疲れもあって他の人を起こす余裕がなかった。
- ・掃除、片付けを促せなかった。
- ・借りていた部屋の南京錠を放置したまま帰国してしまった。
- ・食べる場所と寝る場所を区別するべきだった。
- ・洗濯物やハンガー、洗濯バサミなどの私物に「FIWC」と自分の名前を書くのを徹底させるべきだった。

## 10. 現地での様々な活動

### ・ネパール料理会

2月16日にびおと一ふにて、ネパール料理会を行った。

このイベントの目的は、実際にネパールに行く前に福岡在住のネパールの方と交流することで、ネパールという国のイメージをつかみ、また簡単なネパール語を使ってみようというものだった。

メンバーの友人のネパール人が数名来てくださり、一緒に料理を作りながら話に花を咲かせた。



### ・銀杏旅館に宿泊

ネパールキャンプ恒例となった銀杏旅館への訪問。今回のキャンプでは、先発・後発ともにネパール到着が夕方だったので、銀杏旅館で1泊してからワーク地である村に向かった。

銀杏旅館を経営する筋田さんは、何十年も前からネパール支援を行っている方で、多くのアドバイスをいただき、私たちはネパール支援の一環

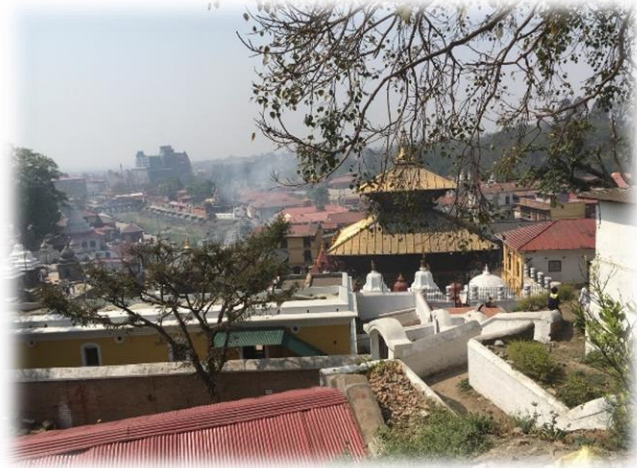
として、日本から子供服を先発・後発ともに60kgずつ運ぶお手伝いをさせていただきました。

また、後発組が宿泊した際には、ネパールで活動している別の団体の日本人学生たちとも親交を深めることができた。



## ・観光

今回のキャンプではあまり観光する時間なかったが、数名のメンバーはネパールの世界遺産などを訪れました。その中でも、一番印象的であったのはネパール最大のヒンドゥー教寺院であるパシュパティナート。この寺院には火葬場があり、次々と遺体が運び込まれてきます。日常では見ることができない、幻想的な風景だった。



## ・ラムチェ村訪問

FIWC 九州委員会の兄弟委員会である FIWC 関東委員会のワーク地が徒歩 1 時間程度の場所にあったため、ワークに余裕があるタイミングで関東のワーク地であるラムチェ村を訪問した。少しの時間ではあったが、関東のワークを手伝うこともできた。関東はばねちゃんの兄弟であるアシスくんをコーディネーターとして活動している。



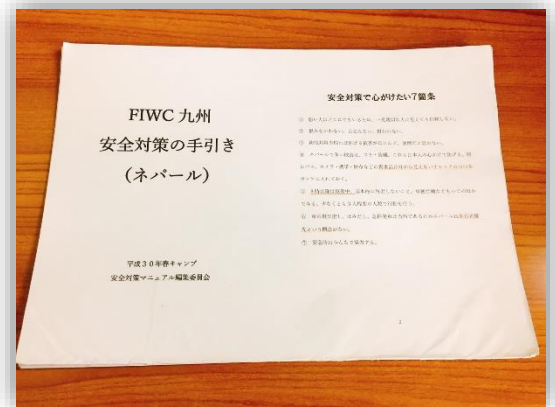
# 11.安全管理について:SP (Security Police)

## ●SP が設置された経緯

FIWC 九州は任意団体であるために民事訴訟の対象を団体にすることができない。そのため、自己責任である前提があったとしても重大な過失が認められればキャンプリーダー個人に訴訟される可能性が大いにあり、NGO 向けの安全対策セミナーを受講した際にキャンプリーダーの責任が大変大きいという指摘があった。従って、キャンプリーダーのリスクを軽減するべく対策を取ることになり、今回の春キャンプより、安全管理について中国・フィリピン・ネパールのキャンプ代表者に加え、安全管理担当者を設けることにした。

## ●SP の仕事内容

- ・事前ミーティングで考えられる危険性に関して話し合っただされた安全ブリーフィングのまとめ
- ・各キャンプの SP とリーダーで安全ミーティングを行ない、事前ミーティングで出された安全ブリーフィングで出された考えられる危険性に対する対処法や予防法を検討
- ・病気や怪我などの医療面や事故、事件の予防や対策について記述した「安全対策の手引き」を安全ミーティングで話し合った内容や調べた内容を作成



## ●反省点

※保健の安全管理に関することは、保健のページの反省と同じである。

<ワーク>

- ・ワークが予定通り終わらず、ワーク期間が延びた。
- ・ワークを行なっている場所に、村の子供が近くに来て危なかった。
- ・ワーク中は安全のため、軍手を着用することを徹底したが、村人に貸したり軍手が破れたりと足りなくなった。
- ・セメントを扱うときは、手が荒れてしまうためゴム軍手が必要であった。
- ・ワーク中に軍手や靴の着用をネパール人には徹底し



ていなかったため、スキルワーカーや村人などのネパール人が怪我をしていた。

- ・公民館の屋根の上に登る時に用いた階段が不安定であったなど、日本人の安全面の確保が足りなかった。

<移動>

- ・首都カトマンズから村への移動や買い物へバルビシに行く時の乗車人数が定員を超えていた。

- ・夜の移動は危険であるが、夜に首都カトマンズから村への移動があった。

- ・飛行機の遅延が生じたが、滞在の延長や航空券の取り直しなどの対応を考えてなかった。

<備品管理>

- ・共用のものの荷物を管理する人が曖昧で、どこにあるかが分からなくなるなどの問題が生じた。

- ・もともと付いていた部屋の鍵がダイヤルロックでなはなかったため、鍵を持っている人がいないと部屋に入れられないなどの問題が生じた。日本から持っていったダイヤルロックを用いることで解決出来た。

- ・盗難の可能性もあるため、部屋の鍵を閉めることを徹底するべきだった。

- ・出国日に自宅にパスポートを忘れた人がいた。

<その他>

- ・安全管理マニュアルを読んでも人が少なく、その周知や確認が足りなかった。

- ・安全管理について、キャンパー内で問題だと思っても意見しにくい状況を作り出していた。

- ・今回、ワークが期日内に終わらず滞在が延びる可能性が生じたが、出国前に滞在延長の可能性を考慮してなかった。

- ・絶対守ることと例外について区別していなかった。

## ●改善策として出国前に考えておくこと

<ワーク>

- ・出国前にパネちゃんの子供だけに頼りすぎず、ワークの期間が延びないように計画を立てる。

- ・ワークの情報の共有を徹底する。

- ・ヘルメットや桶など買った備品の管理を徹底する。

- ・夜中までワークを行うのは周囲が見にくくなり危険なため、1日のワークの時間の長さを管理する。

<移動>

- ・車のチャーター、移動時間に関して考えておく。

- ・ワークが期日内に完成せず滞在が伸びた時の対応を考える。

#### <備品管理>

- ・ダイヤルロックを持っていく。

#### <その他>

- ・何を絶対守るのか(飲酒等の法令違反など)、どこまでを例外として認めるか確認する。
- ・ネパールの交通や飲酒等の法令の確認。

### ●良かったこと

- ・ワークの期間が予定より延びたが、全員無事に予定日に帰国できた。
  - ・ヘルメットを準備したこともあり、大きな怪我がなかった。
  - ・ワーク中にこまめな水の交換と水分補給を行った。
  - ・水を日本人用とネパール人用で分けたため、日本人が生水を飲むことを避けることができた。
  - ・ワークをシフト制にしたことでKP以外の人や体調不良者が休むことができた。
  - ・移動に障壁のあるバンダ(ネパール式ゼネスト)に引っかからなかった。
- ※ゼネスト…全国・全産業または一地方・一産業全体にわたって、いっせいに行われるストライキ。
- ・貴重品の紛失がなかった。
  - ・先発で出国する予定だったキャンパーが、出国前に激しい腹痛に襲われた際、病院に行き後発に出発する判断をした。

## 12. 保険係

### 仕事内容

#### <出国前>

- ・海外保険のデータ、保健カードの回収
- ・アレルギーや持病、常備薬の把握
- ・破傷風、A型肝炎、日本脳炎の予防接種の確認 ※

※これら3つの予防接種は FIWC 九州の安全対策のルールとして、渡航前に接種することになっている。九大病院の先生との相談で決定した。

- ・保健バッグの中身の確認・補充
- ・現地の病院検索

#### <ネパール>

- ・キャンパーの体調チェック
- ・ケガ・病気等の手当て
- ・保健バッグ内の薬等の管理
- ・海外保険データ・保健カードの管理

### 備品

#### 〈日本から持参したもの〉

- ・ガーゼ 一袋：消毒に使用。消毒時や持ち運びには、カットされた状態のガーゼを持って行った方が便利だった。
- ・絆創膏：切り傷・擦り傷等に使用した。キズパワーパッドなど、剥がれにくいものも用意していた方が良い。
- ・手当用の包帯、テープ：突き指等の治療に役立つ。今回は使用しなかった。
- ・消毒液：擦り傷・切り傷等の消毒に使用。
- ・防水フィルム：傷の手当てをしたところを水から守る。今回は使用しなかった。
- ・ムヒ：虫に刺された際に役立った。
- ・サロンパス：捻挫等に使用。
- ・バンテリンゲル：ワークで筋肉痛になった際活躍した。
- ・消炎鎮痛テープ剤：肩の痛み、腰痛、筋肉痛、関節痛に。今回は使用しなかった。
- ・冷却シート：発熱時だけでなく、捻挫の際にも役立った。
- ・オロナイン軟膏：やけど、ひび割れ、あかぎれなどに。今回は使用しなかった。
- ・総合風邪薬：喉の痛みや咳、頭痛等、風邪の諸症状時に使用。重宝した。
- ・解熱鎮痛薬（バファリン）：痛み止めのために。数回使用。

- ・整腸剤：胃の不調や、もたれ、食べすぎ等に効果がある。重宝した。
- ・下痢止め：今回は数回使用した。
- ・ペパリーゼ：胃腸障害時の栄養補給などの効果がある。数回使用した。
- ・便秘薬：便秘の際役立つ。今回は使用しなかった。
- ・酔い止め：酔いやすいキャンパーが個人で持ってきていたため、使用は少なかった。
- ・次亜塩素酸：胃腸の不調者が多かったため、トイレに数回使用した。
- ・虫除け：何度も使用した。肌や部屋にスプレーしておくことで効果があった。
- ・イソジン（うがい薬）：今回は使用しなかった。

#### 〈備品〉

- ・マスク 25枚：個人で持参していたキャンパーが多かったため、保健バッグからは7枚程度使用。
- ・体温計 1つ：計測時間が長く、少し不便。
- ・ピンセット 1つ：棘を抜く際に使用したが使いにくかった。
- ・爪切り 1つ：個人で持ってきていたキャンパーもいたが、使用されていた。
- ・スポーツドリンクの粉末：ワーク時の水分補給や体調不良の際に使用した。
- ・手を消毒するジェル：ウェットティッシュが手元がないときに。今回は使用しなかった。

#### 〈よく使ったもの〉

- ・整腸剤：胃腸の不調者が多く、足りなかった。2瓶持っていくと十分であると思われる。
- ・スポーツドリンクの粉末：ワーク開始後（約16日間）、1日1袋使用しスポーツドリンク用のペットボトルをつくったが、キャンパー数に対し数が少なかった。また、粉末が固まって水に溶かしづらかったため、今後は粉末を新しく買いなおして補充しておくべき。
- ・サロンパス：道が塗装されておらず、石も多いため捻挫することが多かった。2袋ほど持っていっておくべき。

#### 〈今後持って行かなくても良いと思われるもの〉

- ・下痢止め：下痢をしたときは、体が異物を体外に出そうとしているため、止めようとするのは良くない。そのため、水分補給と整腸剤で対処する。
- ・解熱鎮痛薬：発熱時は免疫力が向上し、体温の上昇によって菌が弱体化するため、薬によって熱を下げる必要はない。
- ・イソジン（うがい薬）：喉を痛めた場合風邪薬で対応する。

#### 〈今後用意が必要であると考えられるもの〉

- ・胃腸薬：胃腸の不調者が多かったため、胃腸に対応する薬の種類を増やし用意しておく方が良い。

## ワークや日常生活

〈必要だと思ったもの〉

- ・ 長袖長ズボン、帽子、軍手（多めに！）
- ・ 運動靴
- ・ カップ
- ・ 厚手の寝袋

〈役に立ったもの〉

- ・ ふりかけやお茶漬け：体調が悪い人には特に重宝されていた。
- ・ のどあめ

## ネパールの病院

〈バルビシ（村から最も近い町）〉

喉の痛み、咳、鼻水、腹痛の症状が出たキャンパーが訪問した。ばねちゃんが連れて行ってくれた。簡単な診察をしたあと、薬をもらった。

〈バネパ〉

腹部の気持ち悪さから食事を摂れなくなったキャンパーが訪問した。銀杏旅館を営む筋田さんが連れて行ってくださった。診察後、薬をもらった。

病院名:KRISHNA PRASAD HOSPITAL

住所:Dil Nibas, Chardobato, Banepa-7, Panauti Road

電話番号:011-664332, 9801345102



## 反省

- ・風邪に体温できる薬が解熱剤しかなく、総合風邪薬がなかったこと。（総合風邪薬は後発に持ってきてもらった。）
- ・数の少ない薬があったので、人数・日程を考慮したうえで薬の数を確認すべきだった。
- ・保健係が、MTG 以外で日中の体調不良者をすべて把握できていなかったこと。
- ・乾燥対策・防寒対策の徹底。
- ・皮付き生野菜・果物を食べないようにすること。
- ・浄水器は利用しないこと。
- ・ワークに持っていく小さめの保健バッグが別があれば良かった。
- ・後発用の保健バッグも用意しておいた方が良い。
- ・病院でもらった薬は飲みきる方が良い。
- ・大きめの手洗い石鹸を1つ全体で用意しておくべき。
- ・良かった点
  - ・靴下、運動靴、軍手着用の徹底。（状況に応じて、ヘルメットやマスクの着用）
  - ・体調不良者の情報を必ず誰かは把握していたこと
  - ・毎回の体調チェックの際、体調、ケガ、疲れ具合だけでなく、キャンパーそれぞれが飲んだ薬とその後の状態が確認できたこと。
  - ・手洗い石鹸があったこと。
  - ・体調不良時休息をとれる場所があったこと（銀杏旅館）。
- ・改善策
  - ・風邪や腹痛など、起こりやすいと考えられる症状を改めて挙げ、キャンパー用の薬として、「お腹を下したとき、胃腸薬、整腸剤…」というように種類豊富に薬の量を確保しておくこと。
  - ・体調が悪くなった際には、最終的に保健係に伝わるようにすること（保健係のなかでキャンパーの体調リストを作っておいても良い）。
  - ・今回のキャンプでいつ、どれだけ、何が必要であったかを挙げ、次回のキャンプに向けて共有できるようにしておく。
  - ・次回は予防用の薬を少なめに、対処用の薬を多めに用意すること。
  - ・保健バッグを新しく買う（全て収容用、持ち運び用、後発用）。



## 13. 会計報告

会計係では、各キャンパーから ¥20,000 ~ ¥30,000 ずつを集め、食費や移動費など生活する上で発生する支出に充てた（以下生活費とする）。ワークに使われる費用はワーク費として、別の会計で管理をした（ワークの項目を参照）。以下にその内訳及び反省点を示す。

### 換金

3/1 (木) ¥150,000 → Rs145,500

3/11 (日) ¥110,000 → Rs102,190

現地通貨はルピー (rupee, Rs)。

### 支出

項目		金額 (NRs)
宿泊費	銀杏旅館、カトマンズでのホテル費	58,590
	村での滞在費	50,000
食費	朝、昼、夕食費	49,340
	水	2,840
移動費		37,000
医療費 ※1		2,135
通信費 ※2		2,000
その他 ※3		59,660

※1: 医療費は、体調不良となったキャンパーの病院での診察代や薬代など。

※2: 通信費は、現地で購入した SIM カードおよびリチャージカード代。村に滞在中も日本にいるメンバーとやり取りをしたり必要であれば村人と電話で通話をする機会があったりしたため、連絡をとる手段をもつ必要があった。携帯電話についてはキャンパーが私的に持っていたスマートフォンを使用した。

※3: その他については、生活上で必要となった掃除用ブラシやまな板等の備品。またキャンプ終盤において会計に余裕があったこと、ワーク費から会計上借り入れたいということで一時的に Rs40,000 ほど譲渡していた。これが影響してしまい、反省点で後述する日本円での支払いに至ってしまった。

### 総括

- 反省点
  - 基本的にばねちゃんが立て替えてくれた物も含め、支払い直後にノートに品名、金額等を書くようにしていたが、書いて満足してしまい毎日の確認や共有を疎かにしてしまった。そのため最終日にパネちゃんへの未払いが発覚してしまい日本円を使って支払うことになってしまった。

- またキャンプ前にキャンパー全員でネパールのお金についての情報を十分に共有できなかったため、会計時に大金を一度に財布から出してしまう場面が見られた。

- 改善点

- 出国前にネパールのお金や買い物について全員で共有する時間が必要だった。また今回は基本的に会計だけが日本で購入した領収書を持っていたが、事前に全キャンパーに配っておくべきであった。
- ワーク費と生活費、全体会計と個人費の区別を事前ミーティングで明確化し、しっかり共有する必要がある。会計がスムーズに行くようにネパールの領収書を購入した方がやりやすいことが分かった。
- 漏れがないように毎日ワーク費と生活費を総括でチェックする時間を設け、ミーティングで情報をキャンパー全員に共有するべきであった。

- 良かった点

- なにより最終的に会計のズレがなかったのが良かった。
- 領収書をしっかり揃えることができた。事前に日本で準備していき、使い方も明確に共有できていたため、活用できていた。
- Excel を使って管理していたため計算ミスが少なかった。

- 参加するにあたってかかる費用について

ここでは、キャンプに参加するにあたって1個人がかかった費用の例を示す。

項目	金額 (円)
キャンプ参加費 ※1	1,000
航空券代 (中国東方航空利用) ※2	53,000
生活費	30,000
嗜好品など	2,000
土産代	5,000
合計	91,000

※1: FIWC 九州の規約に則り、キャンプに参加する度に¥1,000 を納める。

※2: 往復分の値段。費用面を考慮して最安値で行けるものを予約した。ルートは福岡 → 上海浦東 or 青島 → 昆明 or 成都 → トリブバンであることが多い。

## 14. 他己紹介

さき

同じ名前なのに、ここまで違うか！？と何度も感じ、気遣い、優しさ、ストイックなところ沢山尊敬しています。ワークリーダーほんとにお疲れ様でした！子どもにも大人にも、誰にでも分け隔てなく接することができて、ほんとに輝いておりました。いわゆる、サバサバ系女子っていう感じで、何かとストイックですが、世界の話と恋愛観の話になると、さらにタフなさきさんがでてきますね。かっこいい！！だいすきです From きい



・しんや

ネパキャン3回目のベテランの1人。会計でも、端末でも、観光でも、困ったときは彼に従えば間違いないと言っても過言ではない。下見のときは飼い慣らされた犬キャラとしての地位を築いた彼も、本キャンプではむしろ後輩を手懐けていた。

また、その愛らしいルックスからは想像もつかないような切れ味抜群のジョークも飛び出す。しかしその切れ味故に知らず知らずのうちに誰かを切り刻むこともあるので要注意だ。

写真は、キャンプ中に21歳の誕生日を迎え村人を巻き込んだ盛大なパーティーで感激している図。

From りょうじ

ともや

我らがネパールキャンプの副リーダー。

キャンプ中『最強チーム』の作り方、『嫌われる勇氣』等、意識高めのお堅い書籍を持ち歩いていたが、ユーモアも持ち合わせている。多くの笑いを提供してくださった()

お酒が入り、「I am a sub leader!!!」と高らかに連呼していた姿が今でも鮮明に思い出される。

たしかにあなたは間違いなく sub leader だ。

From あおい





ふーたさん

重いミーティングでも、いつも整理してくれた元委員長。ボケも突っ込みもできちゃう関西人。後輩をいじりつつ、笑いの腕を鍛えていたようでした笑。いろいろな視点から、冷静に判断して意見を言ってくれて、ミーティングの時とかつい意見を求めてしまうような頼りになる人。

From あいり

ゆうや

ほのぼのしてそうな見た目と裏腹に、頭の中は超ドストレート。なにより、常に周りを見てる。それに対する自分のアンサーも兼ね備えて。裕也の発言は飾りがなくて聞きやすいの！マイナス発言はたまに恐怖を覚えるけど。(笑)でもね、がつんと言ったあとでも、お年寄りや子供たちに見せる気配りや笑顔を見て、何度も心がきれいだと思わされました。中国とネパールをまたにかけ、FIの活動皆勤賞(?)の裕也にこうご期待★



From さき



あおい

ネパールにいる間にも髪を染めたりマニキュアを塗っておしゃれを楽しんでいた少々お茶目な今どきガール。元陸上アスリートで走るのがめっちゃめっちゃ速い。キャンプ中は主にアスリートが良く着ているシャカシャカ系ジャージや陸上の大会記念 T シャツを愛用していた。キャンプ前はおとなしキャラを演じていたようだが、いつのまにかお笑いキャラへと変貌を遂げた。自身の持ちネタも習得し、しばしばキャンパーの笑いを誘ったことは記憶に新しい。今後も癒し兼お笑い要員としての活躍が期待されている。

From げんし

ゆりこ

まさに天使。ワークの疲れも彼女の「大丈夫？」の一言ですべてが吹っ飛ぶ。今キャンプにおいて、何人のキャンパーの疲れを癒しただろうか。そういう意味ではワークの完成への貢献度はリーダーよりも高い。その性格の良さから、何か裏があるんじゃないかと疑いたくなるが、裏がないのが彼女の一番怖いところである。キャンプ中に着用していたもこもこした長袖 T シャツは洗濯時に大量に水を吸って絞るにしてもかなりの労力を必要としたのできつかった。

From しんや



りょうじ

空手マスターの異名を持つ男。

さすが夏の下見を経験した男。

村人との交流を欠かさない男。

村人が開く集まりには必ず参加し、何よりも村人とのつながりを重視していました。

おかげで村の人々から「りょーじ！」と一番名前を呼ばれていたと思います。

そして、パワフルでワークには積極的に参加し、力仕事のなど進んでやりました。

From 大川

ろっきー

ネパール人にもしっかり馴染んでたキャンプリーダーろっきー。ネパールは3回目ということで、生活にはすぐに慣れていたし、キャンパーのだれよりもお腹が強かったですね！抜けていることもあったけど、キャンプでやっぱり最後に頼りになるのはろっきーだったなあと思います。

資材が届くときとか、ちゃんとワークが進むように人一倍動いていたのを何度も見たし、なにかを決めようとするときにはキャンパーのことを第一に考えていました。

村人にお酒を飲もうと誘われたら、時間や体調の許す限り断らず、気分にかかわらずできるだけ村人と一緒にいる時間を作っていて、たくさん言葉を交わして村人と仲良くなっていたのもすごい！村人からは1番慕われていたと思います。みんなを引っ張って行ってくれてありがとう～！



きい

どこかけだるそうな、いつも授業休んでそうな、そんな雰囲気醸し出しています。ネパールでどうなってしまうのか勝手に心配していましたが、肝座りまくっている彼女はとてもネパールを楽しんだようです。心配とか全くいらなかったね。JK みたいにキャピキャピしたかと思えば、落ち着いてしっかり面倒見のいいお姉さんしてたり。これが GAP 萌えですね。きいちゃんってあんまり浸透してないみたいだけど、響きがすごくかわいくて好きだからあたしは構わず呼び続けるね。

From りりこ



げんし

実は大学のクラスが同じにもかかわらず、今まであまり関わりがなかったのでキャンプ中色々な面を発見できました。でも、すごい一眼持って来てたのもあってその印象が強くて、写真の人っていうイメージに自分の中でなりがちですね。けど、写真撮る時に子供とか村人とか集めれるのは魅力だと思います。気を抜くと一眼どっかに忘れがちなのは要注意ですね（笑）

From ふーた

りりこ

こんにちは林田梨里子です。ネパールは3回目です。ワークキャンプはもう何回行ったかわかりません。キャンプを愛しキャンプに愛された女です。

今回持って行った100均のドミノ倒しは、悟の持ち込んだジェンガによって存在を抹消されました。そんな私はまたネパールに行くのではないのでしょうか??

りりこ大好きだよ(‘ω’\*)

From ゆう





おおかわ

第1印象で人をドン引きさせてしまう才能がある。でも、意外な面もたくさんある。色んなジャンルの知識の豊富さだったり、黙々と作業する姿に心を打たれた。

なんとなく自分と似ている部分も多いなと思っている。ポテンシャルがすごいので、これからの活躍に大いに期待している。

From ともや

たなかゆう

「ゆう」って呼ばれたがっているのにも関わらず、「たなかゆう」というあだ名が浸透し悲しんでいる。ついには、村人に「TANAKA!」と呼ばれるほどである。ネパールは3回目のベテランで、FI九州のすべてのキャンプに参加している生きるレジェンド。コーディネーターのぱねちゃんに会いたいという理由でキャンプに参加。ネパール人の優しさに惚れがち。

From ろっきー



あいり



彼女の名前は寺田愛理。

彼女はキャンプ中ママから一番ご飯のおかわりを貰っていたのではないかと思う。と言うのもママはおかわりをするかキャンパーに聞いて回るのだが、愛理には何も聞かずにおかずを配っていた。だからよくそんなに食べれるもんだと感心していた。そして彼女はワーク中に釘を抜く才能に目覚めたらしく暇さえあれば釘を抜いていた(笑)

そんな意外な一面のある寺田愛理である。

From ゆうや

## 15. 感想

### ①轟木亮太（九州大学薬学部3年）

去年の春のネパールキャンプから帰国したときに、もう一度ネパールに行くなんてちっとも考えていなかった。正直、去年の本キャンプで何を学んだのかも自分が何をできたのかもよくわからなかった。また、楽しかったのは事実であるがもう一度行きたいと思うほど楽しくはなかった。春キャンプが終わり、引き継ぎたいというキャンパーがいなかったためネパールキャンプを終わらせたくない一心でリーダーをすることにした。なぜ終わらせたくないかというとはねちゃんという日本語も話せてドライバーもできるパートナーとの繋がりを失いたくなかったからだ。

そして、夏キャンプに渡航しグマンマニサワラ村の人たちと出会った。今回のホームステイ先にパパでもあるパダムさんは、一人で竹のアーチを作り私たちを手厚くもてなしてくれた。そして、この村がいかにコミュニティハウスを必要としているかが心から伝わった。それから半年間は、この村の人たちと一緒にワークをして地震で失われてしまったコミュニティハウスを使えるようにしたいと強く思い行動してきた。その中で、とても多くの方々の支援やアドバイスを受けさせていただいた。とても忙しかったものの、振り返ってみるととても楽しかったと思える時間だった。

いよいよ春キャンプのためネパールに渡った。ネパールでもとても大変な日々であり、私は首都カトマンズに行く余裕がなかったほどである。ワークも出国寸前に何とか完成した。3回目のネパールキャンプで初めて村人とワークすることがこんなにも楽しいのかと気づいた。毎日、熱心に手伝ってくれたクリスナやミーランはあらゆる面で手を貸してくれた。3回目となるとなんとなくネパール語も何を話しているか分かりキャンプの面白さが今までの数倍に感じた。またいつかネパールで仕事ができるといいなと思いながら、自分の思い描く目標を実現できるようにネパールキャンプを糧に頑張っていきたい。

### ②岡田紗季（九州大学工学部3年）

こんなにもたくさんの、考え方も生きてきた環境も違う人と一緒に過ごす経験は、とても貴重で大切な時間だったと感じています。その中で、‘ひと’とその人が放つ‘ことば’について考えることが多かったです。このキャンプを終えて、人間が心を交わすには、言葉は必要ないかもしれないと思っています。

私たちは普段、‘ことば’という自分の意志を伝えるのに最も簡単なツールをもって生活しています。だからこそ、人の心を動かすにも、協力するにも、言葉は必要不可欠であり、最も効果的な手段であると思っています。

今回のネパールキャンプで悩まなかったキャンパーはきっといないと思います。期間や



規模、村人の人間関係、生活環境等、多くの問題に直面しました。その時々においてみんな  
で話し合ううちに、日本人同士の言葉が通じるという環境では、言葉によってその空間が支  
配されてしまうことが、怖いと感じました。言葉の裏に隠された意図を読もうとしたり、も  
しくは発せられた言葉が、あたかもその人のすべてであると思いついてしまったりもあり  
ました。でも、自分の思考には限界があって、人の考えを完全に読み解くことなんてできな  
い。周りの考えに思考を巡らせすぎて、自分の意見さえも分からなくなりました。

そんなキャンプ最後の日の夜、体力も気力も限界に達した中で、村人と夜遅くまでコンク  
リートの作業をした時間を、私は忘れることができません。意味なんて自分で後付けしたよ  
うな「ラッソー！」ってことばで鼓舞し合えること、同じ瞬間に顔を合わせて笑えること、  
辛いタイミングで何も言わずに手を差し伸べてくれたこと。いろんな感情が重なり合って  
泣けてきそうでした。私の心を動かしたのは、ありきたりな言葉なんかじゃなくて、そこ  
にいる人が作り出す、そこにしかない、とても素敵な空間でした。あの日見た暗い夜空の下で  
輝いた村人の笑顔を私は一生忘れないと思います。

言葉が通じないという環境は、とても心地よかった。通じないからこそ、その人の些細な  
行動や対応で相手のことを知ることができる。言葉じゃないところから得られる人柄は、と  
ても本質的な気がしました。

ネパールから帰国し、必要以上に伝える手段を持っている環境だからこそ、自分の言葉を  
大切にしなければいけないし、大事なことを教えてくれるのは言葉じゃないことを忘れず  
にいたいです。

一年間ネパールキャンプに携わり、他では得られない、多くの考えるきっかけを得るこ  
とができました。リーダーの轟木はじめ、このネパールキャンプに関わっていただいたすべ  
ての方に心から感謝しています。ネパールの良さは、どんな時でも振り向けば広大な山々が  
広がっていることだと思います。その景色は何度もちっぽけな私の悩みを吹き飛ばし、心  
を癒してくれました。もし機会がありましたらぜひ足を運んでみてください。ありがとうございました！  
धन्यवाद！

### ③山川智也（九州大学工学部3年）

初めに、ネパールキャンプを支えてくださった方々、本当にありがとうございました。  
このキャンプは皆様の支えなしでは成立しませんでした。

色々得るものが多いキャンプだった。

出国前は、最低限のことはこなしていたが、自分の力不足であまり貢献できていないことが多々あった。それについてずっと負い目を感じながら活動していたが、キャンプ期間にはできることはやりたいと思い、副リーダー（後発リーダー）に立候補した。

副リーダーといっても何もやることないんじゃない？と思われることが多いが、僕は副リーダーはネパールキャンプというチーム全体を見て、一人一人とコミュニケーションをとってどういう悩みがあるかを聞いてみたり、時には意見を言い合って、チームを良い方向に導くべきだと思っていた。

また、ワークやご飯の時間を必ず守るといった当たり前だけど、疎かになりがちなことを率先して絶対守ろうと決めた（1度酔っぱらってミーティングに出れなかったのは、本当にごめんさい）。

ただ、実際問題、ネパールでの生活は過酷で、そのストレスでチームの雰囲気が悪くなったり、体調不良者が出たり（僕も病院に行った）となかなか思うようにいかないことも多かった。しかし、結果としてはメンバー全員が無事に帰国し、ワークも目標を達成した面では自分としては良かったと思う。

と、ここまでは副リーダーとしての思い。ここからは一人のメンバーとしての思い。

僕は下見からネパールキャンプに参加して、ネパールの雰囲気にも慣れ、村人とも毎日のように一緒に騒ぐくらいには仲良くなった。しかし、今回はワークの進行状況もあり、村の滞在のほとんどはワークの手伝い、また、日本人のチームについて考えることが多かった。ゆえに“ワークキャンプ”とは何か、そのうえで何が自分にできるのか、ネパールという地で何をすべきなのかを考えて行動することができなかった。そしてそれは未だに自分の中で納得のいく答えは出ていない。

なにか確固たる芯があるわけでもなく、なんでネパール何回も行くん？って聞かれたときに自信をもって答えることもできない。何週間も海外の山奥の村で生活し、村の人々とお酒を交わすことができるだけでも、いい経験だとは思いますが、どうやらなにか腑に落ちないままネパールでの生活を送っていたようだ。

今回、ネパールを発つとき、もう2度とキャンプには参加しないだろうと思っていた。自分の中でもやりきったつもりであった。だが、このもやもやとした気持ちで終わってしまったていいのか。もう1度根本から考える必要があるようだ。

#### ④寺田愛理（九州大学農学部2年）

未知の場所に行くのが好き、行ってみたい、海外に行く理由はだいたいこれで、加えて発展途上国の支援に興味があることから、キャンプに参加しました。今回は特に自分が福島で

聴いた震災時の話、そして、自分自身が経験した熊本地震を通して、自分の周り以外の震災復興支援に興味を持ち始めたことも行きたいと思った理由の一つでした。

ネパールのことを考えたとき、一番に思い出すのは、村の人たちです。私は後発だったこともあり、シャイだと聞いて想像していたよりもウェルカムな雰囲気です。村に迎えてもらいました。やっぱり個人的に仲良くなるのには時間がかかった人もいましたが、特に子どもたちはすぐに名前を覚えてくれて、朝7時からのワークが始まる前の時期は子どもたちと一緒にいって遊ぶ時間が一日の中で一番楽しい時間でした。ミーランの家の人たちも最初はどのよう接しているかわからなかったけど、拙いネパール語と英語で会話したり、日本語を覚えてくれたり、折り紙をしたりしてどんどん仲良くなれたと思います。

そして、キャンプの目的の一つであるワークでは、周りが動くのを見て仕事を探す必要がありました。拙い英語とネパール語でスキルワーカーに仕事を聞いたり、周りのキャンパーが見つけた仕事を倣ったり、特に最初は何をすればいいかわかりませんでした。それでも、仕事に慣れてきたら、来てくれた村人をどうやってワークに巻き込んでいくかを考えて、声をかけられるようになりました。そして、最後のコンクリートを流し込む作業。雨が降ってきたり、夜が更けてしまったり、環境的にはいい状況ではありましたが、いつもより多く集まってくれた村人たちと重いセメントをひたすら運びました。みんなが一つの目的に対して、言語の壁とか関係なく、声を掛け合いながら動いていたように思います。これがワークか、と感じた瞬間でした。結局、コンクリートを流し終わる作業は日程の関係で最後まで一緒にワークすることはできませんでした。しかし、村を離れるとき、村人のみんなが送り出してくれて、ここでみんなとワークできてよかった、また来たいと強く思いました。

キャンプ中、ワークにしても生活をしていても、周りの人の体調やワークの仕事に気づけたのではないかと、もっと村人を巻き込めるように動けたのではないかと、とまだまだ自分のできることはあったのではないかと後悔もあります。一方で、村の人たちにとって私たちが少しでもいい影響になっていたらいいなと思います。

#### ⑤小牧空（西南学院大学人間科学部2年）

子どもたちに会ってみたい！という気持ちから参加を決めた初めてのキャンプ。初めてのミーティング、ネパールという国、村人、ワーク、みんなとの生活。見るもの全てが新鮮でドキドキしていた感覚が今でも忘れられません。ミーティングを何度も重ねて精一杯イメージしてネパールに向かいましたが、全くキャンプの経験がない私の想像とははるかに違う景色が広がっていて、建物も壊れているものが多く、道も整備されていない、そんな場所での毎日の生活は日本とはかけ離れていました。それでも1日1日を大切にしたいと思える、村人との楽しくて仕方ない時間でした。滞在中、全てが上手くいくわけではありませんでした。何が正解で間違いなのか、何を考え、伝えるべきなのか分からないことが数え切れないほどありました。しかし今まで日本でただただ何も考えず、気づけば1ヶ月、2ヶ月と過ぎていく生活を送っていた私とは比べ物にならないくらい多くのことを考え、多くのこ

とを得ることができた期間になりました。多くの人に影響を与えてもらいました。そして滞在中、1番はどうすれば村人が楽しんでくれるかということを考えながら過ごしました。しかし逆に村人から楽しませてもらったり、癒されたり、もらうものばかりで、分からない言葉の方が多いの、たくさん話して、たくさん笑って、村人との時間は本当に本当に楽しくて幸せでした。自分自身キャンプに貢献できたのか等、反省は多くありますが何より数えきれない人に助けられて支えていただいた感謝でいっぱいになりました。今度は私がこのキャンプの反省を活かし、もっと多くのことを返せるような存在になれるよう次に臨みたいと思います。

#### ⑥大川峻右（西南学院大学経済学部2年）

この1か月のネパールキャンプが初めての海外でした。

小学生のころから毎日地図帳を広げたり、グーグルマップで世界を飛び回ったりしていたので、海外にはとても興味がありました。

その中で国連について興味を持ち、学んでいくうちに、飢餓や貧困など、日本にいると考えることもないことが世界で起こっていることを知りました。そこで、そのことについてより学び、その人たちの手助けがしたいと思い始めました。

今回のキャンプはその思いが小さくも叶ったものになりました。

ネパールでの一か月間はとても学ぶことが多く、濃いものでした。

都市で出会うストリートチルドレンの子たちは無視すべきと教わったが、それが本当に正しい行為なのか、とか、なんで親は子どもに学校に行けと言わないのかとか日々の生活の一つ一つが衝撃的で、多くの疑問がわいてきました。

村での生活は充実したものでした。

ご飯もおいしく、人も優しくとても良い場所でした。

中でも一番おいしかったのは、モモという餃子に似たもので日本に帰ってもモモが食べたくてウズウズしています。

自分は積極的にコミュニケーションを取りに行くではないので、村人と仲良くなれるか、心配でしたが、ほかのキャンパーのおかげで、杞憂に終わりました。

今回ともにキャンプに行った人たちはとてもいい人たちばかりでした。

みんな考えを持っていて、まじめに行動していました。

それに、キャンプ中はみな笑顔が絶えず、いつもどこかで笑い声が聞こえているような楽しいキャンプでした。

ネパールでいろいろな人と出会いましたが、その中でも現地で一番仲良くなったのはコーディネーターをしてくれたパネちゃん、ネパールを離れるとき、一番パネちゃんとお別れすることが辛かったほど仲良くなれました。

また、パネちゃんに会うためにも、まだまだ知らないネパールを知るためにも、もう一度ネパールでワークキャンプをしたいです！！

⑦田中ゆう（九州大学工学部4年）

正直もう行かないかなって思っていたワークキャンプに行ってきました6回目のワークキャンプ、3回目のネパールでした。

なんでこんなにキャンプに行ってしまうんだろうと私自身で不思議に思うこともあります。(笑)もっと他のことに時間を費やしてもいいんじゃないかと考えることもあります。それでもやっぱりキャンプに行くのは、村で暮らして、そこにいる人たちと一緒に何かをすることが本当に好きで、ワークキャンプに関わる人たちに惚れているからだと気づきました。私は3ヶ月に一回のワンピース最新巻発売日を楽しみにしてて、読んでワクワクして、ワンピースからたくさんのことを学びます。それとよく似た感覚で、今回も出国前はやっとネパール行けると待ち望んでいて、キャンプ中は本当に毎日が楽しくて、でも時には失敗して悩んで学ぶことが多くありました。

FIで活動している中で、私はワークキャンプからもメンバーからもあまりにも多くのことを学び、育てられ、感謝してもしきれません。偉そうだなと自分でも思いますが、その受けた恩を返したいなと思って、活動していました。しかし、いつも誰かのためにしようと思っても、私が誰かに与えられるもの以上に誰かから得ることばかりでした。それは今も変わらなくて、ネパールキャンプのために、グマン(村)の人達のために何かしたいと思っても、結局私がある人達から得るもののほうが多くて、ダンネバード(ありがとう)でいっぱいになって、ネパールキャンプや村人のことが更に大好きになって、またここに帰ってこようと思いました。

そしてもうひとつ、私が今回キャンパーとしてネパールに行った理由が、fiwcの先輩の「中心メンバーとしてキャンプに関わった後、OBとして参加することに意味があり、また見えてくる世界が変わる」という言葉でした。私が参加することに意味があったかどうかは、私には答えが分からないことで、また時間が経ってからしか分かりえないことだと思います。しかし、行く度に違って見える景色、名前が同じネパールキャンプでも感じることを変化して、ワークキャンプも私自身も変化していることに気づかされました。ワークキャンプに対して、キャンパーに対して、村に対して、現地の人に対して、コーディネーターに対して、やはり色んな視点から見えてくるようになったし、良いことも悪いことも見えてきた中で、更に今までとは異なる問題も感じ、反対に今まで気づかなかったような素敵な一面に気づけたり、ひとりひとりと向き合える機会が増えたりしたかなと感じました。

最後に、今キャンプも本当に色んなことがありましたが、やっぱり最後は楽しかったと心から言えます。ワーク中も普段の生活の中でもお酒を飲みながら踊り狂ってた瞬間も、本当に楽しかったです！ちょうど去年の春、ネパールキャンプはどうなるんだろうとみんなが不安でいっぱいだった中ここまで無事キャンプを作り上げたロッキー、最後までどうなるかと思われたワークプロジェクトを終わらせたさき含め下見キャンパーのみんなのことを、本当に尊敬しています。このプロジェクトが一段落したことは、素直にすごいと思います。

私は 2 週間しかキャンプに参加できなかったけど、一生忘れないようなかけがえのない経験がこのグマンでできました。ネパールキャンプが続いたのは、キャンパーのみんながいたからです。本当にありがとう。

#### ⑧藤崎慎也（九州大学工学部 4 年）

今回のキャンプに参加したことで、人生で 3 ヶ月をネパールで過ごしたという経験ができた。普通に考えても長い期間ではあるし、自分の中でこれほどまで海外のある一国で過ごしたという経験はないので、何かしらの意味をここに見出すことができると思う。日本とは比べ物にならない不便さや食事の違い、衛生面でのストレスはいつしか気にならないくらいになった。3 ヶ月ともなると、自分の中でマンネリを招くことも多々あったが、それでもなおふとした瞬間に実感した変化や気づきを得ることもできた。

この 1 ヶ月を振り返った上で自分はどんな役割を果たせたのだろうか。意識の方向が日本人チームの方へ、内側へと向いてしまっていたのは事実であった。参加するメンバーの大半が後輩で、彼らへのサポートの側面は今までのキャンプ経験で 1 番強かった。

キャンプ運営において、第一に「ワークキャンプ」のことがあり、村の発展・復興のために活動をしたり、村が再び立ち上がるためにいかに主体性を持たせたりするのか、理念的には大層なものだが、活動の本質な部分でありこの団体の目標とするところである。第二に「自分の成長のために」や「学びのために」。後発途上国の不便な村でも、その環境の違いから大いに学べることはあり、今まで体験してこなかったような気づきを得ることができる。ボランティア 1 つをとっても、どんな事業が効果的でこの団体の理念にそぐうのか考えるべきことは多岐にわたり、検証の場として最適な機会である。単に 1 ヶ月生活してみるだけでも、かけがえのない体験になることは請け合いである。第三はキャンパーチームの運営。15, 6 人の日本の学生だけで 1 ヶ月もの期間を過ごす。初めて参加する人はもちろん、経験がある人でもメンタル面でできなくなってしまいう時期が存在する。生活上意思決定をする中で（特にワーク）自分の思考を形にしなければならぬし、時にはバランスを見なければならぬ場面にも遭遇する。

3 つをバランスよく満足できたのかと考えると、できていないというのが最終的な結論である。個人的な事件としてキャンプ後半の 2 週間は下痢と風邪に襲われていたという体調面での要因も挙げられないことはない。こんな経験は初めてで、ある意味学ぶべきところはあった。ただ、内にも外にも十分な影響を残すことは出来なかった。ワークの性質柄、工事の工程やその耐震性の問題などワークキャンプとしての本質的な部分に深く及べなかったというそもそもの問題も抱えてしまっていた。1 年間かけてプロジェクトを設計した身として、出てきた問題を適切に処理できずずるずるとマンネリな方向へと向かってしまったという反省もある。キャンプ実施中も、要所要所で力になることなんてできなかった。全員でゴールを目指す上で最後まで大人としての行動をとれたのか、目指すべきところに足並みを揃えて向かっていき、また引っ張って来れたのか。周りの様子を見るにそこまでのこと

は出来ていなかったと思う。ネパール出国直前にリーダーが僕に見せたイライラは印象に残っている。予見することもなく目先の課題を淡々とこなしてしまうという日頃の自分のマイナスな部分を多分に出してしまった。

反面、学ぶべきところも多かった。3回目の滞在ということではあったが気付かされることはまだあるのだという気付きの連続だった。当然村では作物を育て、家畜も飼っている家庭が多い。その事実不改めて心を打たれるキャンパーも多い中、特に感じる場所は自分自身あまりなかった。実際に目の当たりにしたところで、そういう現象があるのだと知覚するに過ぎなかった。改めて生活してみても皆が思ったような、原点に回帰した気分を感じることができた。お金というのも思えばただの紙切れなわけで、そこに疑問を感じずに価値を見出して使っている現状に奇跡とも思えるような感情を抱いた。現地の村の生活のような自給自足の環境が自分たちの考える本来の姿で、そこと比較して成り立っている貨幣社会の異常さみたいなものに巡り合った。過去2ヶ月を漠然と過ごしてしまっただけからなのか、この1年間で人間的に成長できたからなのかは分からないが、自分の中で起こった変化を非日常的な生活の中で見出せたと思う。

元々思い入れの強い性格ではないこともあるが、このプロジェクトにしる自分の人生にしる「通過点である」という意味合いの強いものとなった。自分の力を結果にする能力がどれだけないのかという事実を突きつけてくれたし、そこで自分を管理する力が足りないのかを教えてくれた。逆境下での心の管理、そこから派生する行動の管理については自分でも頑張ったと言える側面もあったが、まだまだ成熟できていない部分も感じた。この経験がいつか繋がることを願って、自分なりの言葉でまとめていきたい。

#### ⑨白坂亮二（九州大学薬学部3年）

正直に言うと、僕は出国時ですらネパールに行く目的がはっきりしていなかった。だから、帰国のとき行ってよかったと思えたらいいなと漠然と考えていた。そして帰国した今、振り返ってみると……行ってよかったと思う。そう思える主な理由は2つだ。

1つめは、村人と仲良くなれたことだ。下見のときは、僕は個人的にコミュニケーションが上手く取れない苦悩から、積極的に村人と話せなかった。しかし今回は下見のときより長く、またワークもあったため、コミュニケーションの機会は増え、かなり打ち解けることができた。特にミーランは、キャンプの終盤で一緒にお酒を飲んでいるときに僕を兄弟と呼んでくれて、別れが辛い、また来て欲しいと涙ながらに語ってくれ、僕もつられて泣いた。村人と築いた絆に気づいた、最高の瞬間だった。

2つめは、困難な問題を何度も克服できたことだ。このキャンプは本当に課題の多いキャンプであった。課題に直面するたびに絶望的な気分になり、嫌になるときがたくさんあった。しかし、キャンパーみんなや現地の人と協力しながら全部の課題が解決された。この経験は、僕がこの先の人生で絶望したときに、大丈夫だと考えるきっかけになるだろう。

このように、このキャンプでの経験は僕の人生の中で貴重な財産となった。最後に、この

キャンプを支えてくれた全ての方々、本当にありがとうございました。

⑩武本彩希（西南学院大学人間科学部2年）

この春訪れたネパールをいう国のことを私は何も知らなかった。ネパールがアジアのどこに位置しているのか、どんな言語を話すのか、どんな生活をしているのか、全く想像もできないくらいだった。正直、一ヶ月間やっていけるのだろうかと不安だらけだった。それでもネパールに行きたいと思ったのは、公民館を建ててほしいという現地の村人の思いがなんというか、ずっしりと伝わってきて、少しでも自分にできることがあればいいなと考えたからだ。ミーティングが始まる前までは、「復興の手伝い」というのがネパールに行く目的だった。しかし、ミーティングが始まり、現地の様子がだんだんわかってくると、ネパールの教育事情について興味がわいた。将来の夢が保育士ということもあり、発展途上国の教育に対しては前から関心があった。ネパールは発展途上国の中でも、発展がだいぶ遅れているほうで、「どんな教育が行われているのか知りたい」という思いが何よりも強くなっていた。

一ヶ月間の村での生活が始まり、村人と慣れないネパール語やジェスチャーを使ったコミュニケーションをとる毎日がすごく楽しかった。気さくな村人が多く、「ナマステ〜！」と手を合わせて挨拶をすれば、大人でも、子どもでも、誰でも必ず笑顔で「ナマステ！」と返してくれる。こういった短い単語でのやりとりをするだけで、心が温まる経験なんて今までしたことがあっただろうか。人と話す楽しさを感じ、道で村人と会うことが楽しみになっていた。しかし、幼い子ども（3歳〜小学校低学年くらい）とのコミュニケーションのとり方には、初めてとても悩んだ。人見知りで、恥かしがり屋の子が多く、話しかけても、反応してもらえないことがたびたびあった。話しかけることをやめようかと諦めかけたときもあったが、現地の村人と話している子どもたちの様子をみていると、屈託のない笑顔が本当にかわいくて、一ヵ月後には自分にもこの笑顔を見せてくれるといいなと思った。村での生活を始めてから1週間ほど経つと、意外にもあっさりと心を開いてくれて、仲良くなった子どもたちの生活を通して、ネパールの教育事情を知る機会を多く得た。

後発発展途上国とはいえ、私たちが生活した村にも小学校があり、保育所も併設されていた。学校のほとんどの先生は英語を話すことができるようであったが、もちろん子どもたち全員が英語を話せるわけではない。しかし、英語を話せる子は時々難しい単語が出てくるほど、堪能だった。先生に「どうして英語が話せる子はこんなに堪能なのか、逆に全く話せない子がなぜいるのか」聞いたところ、「ネパールでは公立の小学校でも、一学年から本格的な英語の授業がはじまり、毎日のように学校に登校できる子が英語をしゃべれるようになることが多い。だけど、ほとんどの子どもは家の仕事の手伝いがあるため毎日学校に来ることができない。だから、話せない子が多いんだ。」と教えてくれた。そういうことか、とすぐ納得はできたが、同時に、教育を受けるのは子どもたちだけど、大人が教育の大切さを理解しない限り、何も変わらないなと思った。ネパールが発展するには、将来を担う子どもたちの教育が大切だと思っていたからだ。



しかし、一ヶ月間村で生活をしている間、本当に発展する必要があるのだろうかと考えることが何回もあった。そう思うきっかけは様々ではあったが、子どもたちの笑顔をみて考えることが多かったと思う。家の手伝いが多くても、いつ会っても笑顔で、自分で楽しみを生み出そうとする姿は羨ましいと思うくらいに輝いてみえた。世界的に見れば、出会った村の子どもたちは毎日学校に通えず、十分な教育を受けていないだろう。しかし、インターネットや携帯の画面越しではない、人との直接的なコミュニケーションを大切にしている村人の姿を見て、学校では学ぶことのできない素敵な何かを、村の子どもたちは自然と学んでいるのではないかと思った。たった一ヶ月いた私でさえ、村人の姿から教わったことはいくつもあったのだから、村の子どもたちは数え切れないくらい学校では学ぶことのできない素敵な何かをこれからも学んでいこう。学校だけが教育の現場ではないということだ。一ヶ月間の村での生活を通して、教育に対する考え方が変わったことは、良くも悪くも夢に影響をあたえたことは間違いないと思う。どんな影響を受けたとしても、ネパールで過ごした一ヶ月は、人生の中で貴重な宝物だ。

#### ⑪豊田玄志（九州大学工学部4年）

キャンプが始まる3か月前まで、自分がネパールに行くなんてことは全く考えてなかった。たまたま話を聞いたことで、途中参加という形ながらもキャンパーとして迎え入れてもらった。そのことにまず感謝したい。私がこのキャンプへの参加を決めたのは、話を聞くと単純に面白そうだったから。今まで国際交流と呼ばれるような活動をしてきたこともあり、海外に行ってボランティアをするということに興味を湧いた。最初はネパールの人たちを助けたいからというよりも、今までしたことのない経験だからという漠然とした思いだった。こんな中途半端な考えでいいのか少し悩んだが、やってみないことには始まらないと思い参加を決めた。

FIWCないしネパールキャンプが一体どういうものなのか、初めはよくわかっていなかった。それでも、日本出国前にミーティングを重ね過去の報告書を読んでいくうちに、ネパールの人たちの力になりたいという気持ちが少しは出てきたし、キャンプの目標とは別に自分なりの目標も立てた。「子供たちと仲良くなって日本に興味を持ってもらうことで、将来日本ないし海外に行きたいという子を増やし、彼らの将来の選択肢を広げる。」これが出国前に立てた自分の目標。ネパールはアジアの中でも最貧国で、カースト制度も存在する。そんな中で生まれ育ったら将来の選択肢が相当少ない。もし、子供たちに日本や海外に興味をもつきっかけを提供できれば、将来、海外で勉強し、学んだことを持ちかえって国に貢献するような人も出てくるのではないか。そうすれば自ずと選択肢は増えるし、ネパールがより良い国になるのではと考えた。壮大に聞こえるのはわかっていたが、実際にネパールに行っただけの現実と机上で立てた目標にはやはり大きなギャップがあることを痛感した。今思えば、目標は半ば強制的に考えたことで現実を知らなかったからこそ立てることができた、助けたいと思ったのは思い込みだったのではと思う。

ネパールの村に行って感じたこと、それは、子供たちにとって自分はただの一時的な遊び相手でありたった三週間で子供たちの人生を変えられるほど自分に影響力はない（年単位で継続しないとだめ）、日本やその他海外に行くにはビザ・保証人・お金などの問題が大きい、ということ。この村の人たち、ネパールの人たちを助けたいという思いが本当であって自分が立てた目標を本当に達成したいのであれば、本腰を入れて仕事や活動を継続していくべきであるが、自分がネパールに滞在するのはたったの三週間。できることは限られていた。だからこそ、キャンプ中はわざわざネパールに来てワークをする意味や目的が見いだせないことが何度もあったし、キャンプ前にネパールの人たちの力になりたいと思っていたのはただの思い込み・偽善ではと感じた。こんなとこまで来て一体何をしているのか、村に大した影響はないんじゃないか、本当に村の人のためになっているのか、別に自分じゃなくてもいいんじゃないか、いろんなことを考えた。ただネパールの山奥に来て生活しているだけ。それ自体貴重な体験であることは間違いないが、自分ができることがわからなかった。

しかし、そんな中、こんな出来事があった。村に行ってからというもの、ワークでは、自分たちが作業をしても思うように村人が集まらないことが多かった。このネパールキャンプの「村人との交流を深め、共に楽しみながらワークを行うことで村人の自主性を育て、村を活気づかせる」という目的が果たされていない状態だった。この状況をどうにかするためには、もっと村人たちに自分たちがしようとしていることを理解してもらうことが大切だと考え、みんな村人とのコミュニケーションを積極的に取るようにしていたが、それでもなかなかワークには来てもらえなかった。しかし、ある日、そんな状態を見かねた村人のひとりが、「自分たちの公民館なのに日本人に任せてばかりでなんで手伝おうとしないのか」と、村人を集めて本気で怒っていた。普段笑顔の優しい彼がそこまで怒っているのは初めて見たが、それだけ思いが熱い証拠だった。それから以前より村人がワークに参加してくれるようになった。自分たちのものは自分で作るんだという気持ちが芽生えたのだと思う。そのおかげで村人との交流も以前より増え、ワークも活気づいた。自分たちが起こした行動が、直接的ではなく間接的ではあるが、結果的に村人が自主性と熱い思いを持つきっかけになったこの出来事は、自分でも少しは力になれたんじゃないかと思えた瞬間だった。

今振り返ってみると、このキャンプは想像以上に濃く、楽しいことも大変なことも全てが一気に押し寄せたような三週間だった。初めはシャイで喋ってくれなかった子供たちも一緒に遊ぶうちに自分の後をつけてくるようになるくらいまで仲良くなったり、見知らぬ外国人である自分を家に招き入れてお茶や食べ物をごちそうしてくれたり、一緒にお酒を飲んで踊って騒いだりしたことは本当に楽しかった。言葉はほとんど伝わらなかったが、ネパール人とか日本人とか関係なく、同じ人間同士の付き合いというものを感じた。

その一方で、理解しづらいことがあったのも事実。計画を立ててもほとんどその通りにはいかない、時間を守らない、ワーク中に突然お酒を飲みだして中断になるなど、言葉が通じないこともあり予測不可能なことが多かった。思わずため息をつきたくなるようなこともあったが、彼らには彼らの文化・考え方がある。自分たちとは育った環境も大きく違う。日

本人に合わせてくれというのもおかしい話で、こっちがとやかく言っても彼らにとっては理解するのが難しいこともあるし、逆の立場でも同じ。自分たちがネパールに行っているならできるだけ彼らに合わせるべきで、そのやり方を受け入れる。彼らを理解して、自らを伝え、どう進めていくのがベストなのか、それを考えて行動するのが自分たちの役割だったと思う。

様々なトラブルが生じたこともあり公民館の屋根の完成は予定日より大幅に遅れたが、最終的には帰国日前で完成させることができた。しかし、ロッキー以外は完成を目にすることなく村を出発することになった。このことは少し心残りである。

出発の日、村人が集まってお別れセレモニーを開いてくれた。完成を見れなかったし、村と村人ともお別れだったが、すごく寂しいわけではなかった。また会う気がしたし、実際会うのだろうと思ったからだ。公民館を作りに行ったが、同時に、また会いたいと思える人ができたこと、このキャンプで得ることができた自分にとって一番大切なことなのかもしれない。

#### ⑫林田梨里子（九州大学工学府修士1年）

下見キャンプが終わってから不安ばかりだったが本キャンプが無事終わって本当に良かったというのが今の素直な気持ちである。学生団体としてこんなに大きなことをやっていいものか、というか出来るのか。もうやめてしまったほうがいいのではないかと思ったこともあった。しかし私はあの村の人々に出会い、純粹に村人のために動いたことは良かったと思っている。確かに後悔や反省はたくさんあるし、もっと自分にもできることあったんじゃないかと考えればきりが無いけれど、メンバーがたくさん考えて行動して遂行したこのプロジェクトは村にとって、メンバーにとってプラスに働いたと信じている。今回は前キャンパー等と共に1週間程度で渡航したため、ほぼプロジェクトを見ることができなかった。グマンマニスワラ村に滞在した時間は3日もなかったが、村人たちの優しさと活気がこの村でプロジェクトをやってよかったなと思わせてくれた。

「学生がやることならば活動する学生自身のためになる活動を、お金を使わずに行ってほしい。」と筋田さんはいつもおっしゃる。4年間FI九州で活動してきて私が学んだことは何なのだろうと考えてみた。たくさんありすぎるのだが、1番は人のことを思いながら行動することの難しさである。活動することで現地にとってマイナスに働いてしまうことやこうしたい！と思ってもどうしていいかわからないことがたくさんある。そんなときメンバーと話し合いながら最善策を考え行動に移す。これは何をやるにも必要だと思うので、これからFIの活動形態が変化していても、人に対する思いやりを忘れず様々な角度から考え活動することは大事にしてほしいと思う。

助成金やクラウドファンディング、コーディネーターとの意思疎通など乗り越えなければならぬことがたくさんあった中やりきったろっきー・さきをはじめメンバーの皆さん本当にお疲れ様でした。一緒に活動して楽しかった！ありがとう！

⑬松下佑里子（西南学院大学人間科学部3年）

「キャンプに行こう」と決めたのは、FIについてまだなにも知らないときでした。“大学生でなにか今しかできないことをしたい”、“強く思い出に残ることをしたい”と考えていたとき、ふと、ちかのキャンプの話を思い出したのが始まりです。下見メンバーの紹介動画からは、ネパールという未知の国の魅力や村人たちの温かさ、メンバーの個性が伝わってきて、とても惹きつけられました。そして、震災の被害に遭った場所で私にもできることがあるなら役に立ちたい！という思いもあったことから、キャンプ地をネパールに決めました。

想像通り、村人やキャンパーたちと過ごす毎日は居心地がよく、楽しかったです。ネパールでの生活は、初めて経験することで溢れていました。慣れないこともたくさんあったけれど、車に乗ると体が飛び跳ねるほどのガタガタ道も、独特なお酒も、ネパールの音楽に合わせて村人たちと踊るダンスも、すべてが新鮮で、それらを味わうことができ、幸せでした。村人たちは挨拶をするとにこにこして返してくれるし、手を振ってくれます。初めは全くと言っていいほどわからなかったネパール語も、ジェスチャーを使ってでも私たちとコミュニケーションを取ろうとしてくれる村人やママたちの姿を見て、もっと話せるようになりたい！と必死に覚え、少しは会話ができるまでになりました。村の人たちとコミュニケーションをとるのは本当に楽しくて、彼らが次第に自ら話しかけてくれたり、近くに来てくれたりするようになったのが心から嬉しかったです。

キャンプに行く前、「素人である私たちが現地に行きワークをする意味はあるのか？私たちにしかできないことは何か？」と問われました。当時、私にとってこの質問は難しく、自分のなかではっきりとした答えが出ませんでした。しかし、村での生活を通して改めて考えると、私たちにしかできないこととは「思い入れのあるものをつくること」「時間を共有し、思い出をつくること」ではないかと思いました。

たしかに、村人が必要としている公民館を造ることだけを目的とするなら、お金を業者に渡し建築を頼んだり、お金を寄付してそれがきちんと使われるように、日本人数人が村人の行動や作業を監督したりする方が効率が良いかもしれません。しかし、私たちが村人たちと交流し、一緒に作業を行い1つのものを作り上げることによって、その「公民館」は村人にとっても私たちにとっても思い入れのあるものになると思います。そうなれば、村人はより大切に公民館を使ってくれるのではないかと考えました。

また、文化が異なるネパール人と日本人の交流は、お互いにとってとても新鮮であると実感しました。このような時間は、これから何度も経験できるとは限らない、貴重なものだと思います。そのため、ネパール人と日本人がそれぞれの日常から少し離れてともに時間を共有することは、かけがえのないことであると感じました。

今回のネパールキャンプでは、多くのネパール人と出会い、初めて英語以外の外国語を使い、現地の習慣に基づいて生活して、本当に多くの刺激を受けました。考えさせられることもたくさんあり、なによりもネパールや村のことが大好きになったので、この1ヶ月間は

一生に残る思い出になりました。参加して本当に良かったです。この村に必ずまた来てみんなと会うと約束したため、それまでにネパール語をもっと上達させておくことが目標です。

#### ⑭鈴木優太（九州大学工学部4年）

自分はあまりボランティアといった活動に向いていると思ってなかったし、今まで活動していて自分にこういった活動が合っていると思ったことはあまりない。正直に言って、初めて海外の活動に参加した1年の春を境にこの活動を続けるか悩んだほどだ。それでも、今までこの活動の中に身を置いてきた理由は一言で言って「ワークキャンプの醍醐味を味わいたかった。」からだ。1年の春に行ったキャンプでは、納得できるほど味わえなかったと思ったのだが、その後も多くの先輩、また後輩が海外でのワークキャンプの魅力を語ってくれるのを聞くと、自分もそれをいつか味わえるのだろうかという興味は絶えず持っていた。それと、自分の考えでここは失敗だったのだが、ただ行くだけでキャンプの醍醐味を味わえるとも思っていた。これは、行くことが大事といった意見が勝手に自分の中で変わっていたのだろう。3年の春を逃すともう時間的にチャンスがあるか分からないと思い、今回ネパールキャンプへの参加を決めた。

行ってみてやっと気づいたことだが、FIWC九州のボランティア活動を行うにあたって、本当にキャンプを充実させるためには「村人のために」という意識や思いが一番重要なものだと思う。

「村人のために」という意識がなければ、村人との交流は単に情報交換としての交流でしかないし、ワークも単純に仕事という認識になってしまい決して楽しく自ら進んでやりたいものにはならないと思う。それに加え何かものを作るキャンプでは、実際村人がそれを使う光景がイメージできていないと、自分がいったい何を作っているのかということも分からなくなってしまう。逆に、村人と深い関係が構築でき、村人を自分に近い存在と感ずることができると、ワークはいわば家族に対して行うようなものになり、そうなればしてあげたいという意識が先行するかもしれない。あえて言い切らなかったのは、自分はキャンプ期間中そういう思いにはなれなかったからだ。けれど、実際そういう思いで活動しているキャンパーはいた。自分はそれを見て心底羨ましかった。

村人との交流はキャンプが始まらないとできないことだと思うが、村に行っていかに早く村人と交流し、村人の立場に立てるくらいの理解と関係を構築できるかが、自分の参加するキャンプの充実度いわば「醍醐味を味わえる」かにかかってくると思う。参加者の中には意識せずとも深い関係を構築できる人もいると思うが、自分を含めそうでない人は十分に想像力を働かせて、いち早く村人の立場に立てるような交流を進んでいくしかないと思う。ここは、得意不得意だと思う。もしキャンプに参加してみて不得意な方だと気付いた時には、人一倍意識して頑張りたいとしか自分は言えない。FIWC九州に入って丸3年、2回目の海外キャンプでやっとボランティアのきほんの「き」が分かったような気がした。遅かったかもしれないが最後に気づけて良かったと自分では思う。

最後に、話は変わるがキャンプ期間中日本人が周りに多い環境だったので、海外にいるという感覚はさほど強くなく、そのことによる刺激は良くも悪くもあまり多くはなかった。ただ、村というある種閉塞的な環境の中で、村人や日本人キャンパー、村自体や FIWC 九州含め、様々な人や集団と関わる中の自分自身について内面的に考えさせられることが多かった。そこで自分の意見に自分本位的なものや、初めから一定の意見を排除したようなものが多いことに気づいた。普段とは違う環境になると余裕のない自分本位な考えに極端になりやすいと気付けたのは、個人的には反省であり学びだったのかなと思った。

#### ⑮洲崎裕也（西南学院大学人間科学部 2年）

今回私は一度に二つのキャンプに参加した。

理由としては2年生でキャンプに行ける確証がなかったため時間のある今のうちにキャンプに行きたかったのと、交流がメインであるチャイナに参加した後にワークがメインのネパールに参加して、二つのキャンプにどんな違いがあってどんな魅力があるのかを知るために参加した。それともう一つ、私は現地の言葉はもちろん英語もほとんどしゃべることはできない。けれど私は色々な国の人と交流して言葉が通じなくてもコミュニケーションを取れるということを証明してみせたかった。

これらの理由からネパールも参加してみようと決めた。

私は村でのフリータイムの時に村人にワークに手伝いに来てもらいたいと思い、一人で visit を行ったりしていた。すると村人は今まで見たこともないであろう日本人に優しく接してくれて、日本はどんな国なのか聞かれたりした。これにより村人に「日本人と会話する」という非日常を経験してもらえたのではないかと思う。

私はキャンプをする目的として、わざわざ学生が10万円も払って普通行かないであろう村に行って何が出来るのであろうと考えていた。考えた結果、村人に「非日常」を経験してもらうことではないかと思った。「非日常」を経験してもらうことによって今まで同じことの繰り返しだった生活に楽しみが出来るのではないかと思ったからだ。またべつのフリータイムの時も人があんまりいなさそうなところに visit に行きお茶を貰ったりクッキーを貰ったりして、特に何をしたわけではないけど同じ「時」を過ごしました。

ただ同じ時間を過ごしただけで何の意味があるかと思う人がいるかもしれません。しかし私はこれにとっても重要な意味があると思う。それは、村人からすれば我々は異国の人間で何をしに来たのかもわからないと思う。だが「こういう人が来たよ!」という存在を認識してもらうだけでも「この日本人知ってるから行こう」となるかもしれない。ということは、今後ワークに手伝いに来てくれる村人が増えるかもしれないという事だ。これは今後のワークの進行にも影響してくるので、何かしようとしなくてもいいから、同じ「時」を過ごしてみるのもありなのかもしれない。

そして私は村人と会話によるコミュニケーションはあまりできていない。その代りメモ帳を使って絵を描いて説明したり、body language でコミュニケーションを取ったりした。

これにより、英語が出来なくてもコミュニケーションが取れるし言語なしでもコミュニケーション出来るんだと感じました。

そして最後に、さっき書いたこととも被ってくるがワーク中心のキャンプで visit をする意味があるのか？ということである。

今回のキャンプで数名がフリータイムの時キャンパー同士で話していて時間の無駄遣いをしていると感じました。別にキャンプで何をしたいかは個人個人違うから visit を強制はしたくないが、せつかく辺境の地に来ているから色々経験して帰ればいいのかと思った。

Visit のやり方がわからないという意見もあったが、それは受け身になっているだけで自分でどうすればいいか考えてないだけで、私も以前交流メインのチャイナキャンプでどうやって交流していいかわからなかった。だから先輩に聞いたり、自分どうやればいいのか考えた結果、たばこを使って交流をやってみようと考えた。これにより村人とたばこを一緒に吸ったりして仲良くなった。

おそらく新キャンパーも村人とどのようにコミュニケーションをとったらいいかわからなくなることがあるだろう。しかし自分で何が出来るか考えてみるのが大事だと思う。自発的にやろうとするだけでもキャンプで得られる経験は変わってくる。

# 03 2018 Spring NepalCamp



- 轟木亮太 九州大学薬学部 3年
- 山川智也 九州大学工学部 2年
- 岡田紗季 九州大学工学部 3年
- 林田梨里子 九州大学工学府修士 1年
- 藤崎慎也 九州大学工学部 4年
- 小牧空 西南学院大学人間科学部 2年
- 白坂亮二 九州大学薬学部 3年
- 大川峻右 西南学院大学経済学部 2年
- 武本彩希 西南学院大学人間科学部 2年
- 洲崎裕也 西南学院大学人間科学部 2年
- 寺田愛理 九州大学農学部 2年
- 鈴木優太 九州大学工学部 4年
- 田中ゆう 九州大学工学部 4年
- 松下佑里子 西南学院大学人間科学部 3年
- 豊田玄志 九州大学工学部 4年

FIWC九州(代表:鈴木優太)  
 Mail: fiwcq@hotmail.com  
 Web: <http://fiwckyushu.jimdo.com> (FIWC九州公式HP)  
 Twitter: @fiwckyushu

